

令和4年度

研究紀要

研究テーマ

鎌倉養護学校における組織的な授業改善に関する研究



神奈川県立鎌倉養護学校

はじめに

令和5年春、神奈川県立養護学校に大きな節目がやってきます。神奈川県立特別支援学校が盲学校、ろう学校を除いてすべて支援学校へと校名が統一されます。大河ドラマ「鎌倉殿の13人」で脚光を浴び、歴史と古都の魅力が再注目された鎌倉。その古都鎌倉の地で43年の歴史を刻んだ本校も鎌倉養護学校から鎌倉支援学校へと名前を変えます。

校名が変わるということは学校にとっては大きな出来事であり、新しい何かが始まる期待感が湧いてきます。このことは子どもたちにどんな未来を思い描かせ、新たなステージで学校は新時代にふさわしい夢や希望を子どもたちにどう与えていくのでしょうか。近年の進化したAI（人工知能）が様々な判断を行ったり、身近なものの動きがインターネット経由で最適化されたりする情報化やグローバル化の中、また感染症による世界的なパンデミックを経験し未だ収束が見通せない状況の中、予測を超え加速度的に進展と変化を繰り返し社会が大きく変わっていこうとしています。この、複雑で予測困難な社会の変化を前向きに受け止め、社会や人生を「人」ならではの感性を働かせてより豊かなものにしていくことこそが、「生きる力」となり「夢や希望」や「生きていることの実感」へつながっていくのではないかでしょうか。子どもたちが生きていくこれからの時代は、我々が思っている以上に色鮮やかになるかもしれません。しかし、経験したことのない事態に遭遇しそれを解決していくことになるかもしれません。もしかしたら厳しい状況の中、長く耐え続けることを求められるかもしれません。困難な局面の中でも自分らしさを大切にしながら、夢や希望をもって未来を生き抜くたくましさを育てることが学校の大きな使命であり、新たなステージでも目指すものになっていくはずです。

「鎌倉養護学校における組織的な授業改善に関する研究」をテーマに、今年度の研究を進めてまいりました。肢体不自由教育部門小学部、中学部、高等部と知的障害教育部門高等部本校と金井分教室、施設訪問小さき花の園、在宅訪問と、本校に在籍するそれぞれの児童生徒の発達段階や特性に応じた主体的・対話的で深い学びの実現に向かうための組織的な工夫や改善が、教職員一人一人の専門性の向上と、魅力的な授業実践となり、子どもたちの「これから先の社会をたくましく生き抜く力」を育てることへと一歩進めたのではないかでしょうか。

子どもたちがその人ごとの役割を果たすことで、「人に認められ、期待されていること」、「誰かに必要とされ役立っていること」を実感できる毎日を送ることにこのことがつながり、将来の自立と社会参加に向けての力と成りうることを願うと共に、児童生徒がそれぞれの力や個性に合ったステージで、大きく羽ばたきキラキラと輝くことを心から楽しみに、これからも全職員気持ちをひとつに進んでいき、その組織的な知恵と工夫が鎌倉養護学校から鎌倉支援学校への輝かしい第一歩につながっていくことと思います。

今年度のまとめとして、本冊子をみなさまにお届けいたしました。ご一読いただき忌憚のないご意見、ご指導をいただければ幸いです。

令和5年3月

神奈川県立鎌倉養護学校
校長 佐藤 元治

目次

はじめに

学校長 佐藤 元治

校内研究の概要

1

肢体不自由教育部門

小学部	教科ごとの領域・ねらい等の理解共有	3
中学部	授業振り返りツールの活用と検証 ～ソーシャルコミュニケーション（通称 SC）の授業を通して～	17
高等部 A	社会生活の授業における自立活動の視点での再整理と授業改善	29
訪問教育		43
在宅訪問	在宅でのコロナ禍の学校生活について	45
施設訪問	自立活動の視点を活用した授業実践	47

知的障害教育部門

高等部 B 本校	集団としての実態把握をもとにした授業の計画・実践を通して	49
高等部 B 分教室	ねらいとそれに対する学習活動の内容等の共通理解	55

おわりに

副校長 佐藤 浩栄

研究テーマ：「鎌倉養護学校における組織的な授業改善に関する研究」

1. 研究について

- ・令和2年度小学校、令和3年度中学校、令和4年度高等学校の順でスタートした新しい学習指導要領であるが、その中にある「主体的・対話的で深い学び」を学校全体でどう理解し、日々の学習の中に取り入れていくのかを学年・学部の中で考え実践に向けて検討していく場とする。

2. 研究の方向性

- ・令和3年度から2年計画での研究テーマに沿って “実践を通した研究・検証” を行いながら教員の専門性の向上と研修ができる内容にする。
- ・研究の時間や研究の内容そのものが各学部で直面している課題の克服や指導力の充実・向上につながり、各学部の学校目標の達成に向けた取り組みとして実践できるようにする。

(1)令和3年度校内研究の取り組み

サブテーマ「- 集団としての実態把握をもとにした授業の計画・実践を通して -」

3. 研究方法

- (1) 各学部・学年ごとに行っている児童生徒の実態把握を自立活動の内容6区分27項目に沿って学部・学年・グループごとに表にまとめる。
- (2) 研究授業や日々の授業に活用する。
研究授業を行う際には、各学部・学年でまとめた表から、その単元設定の理由となる実態を抜粋して、授業を受けている児童生徒の実態を示す。(個別課題などの授業を行う際にも可能な限り活用していく)
- (3) 授業の実践を通して集団の中で自立活動の視点がどう活かされているのかを各学部・学年で検証し、研究成果としてまとめる。

(2)令和4年度校内研究の取り組み

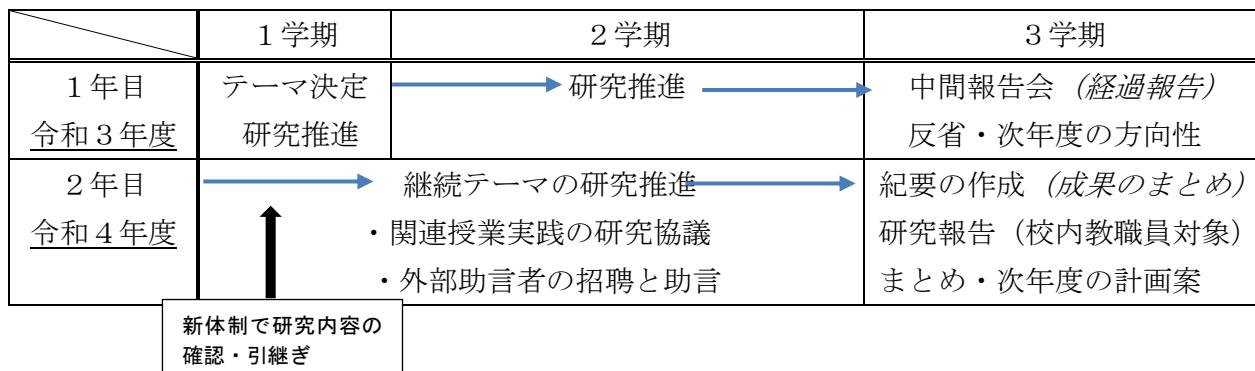
柱①・客観的に授業を評価し、改善する視点を持つこと、その手段の一つとして集団授業での実態表の活用

柱①を踏まえて今年度の取り組みテーマとして以下の2点にまとめる。

柱②・教科ごとの領域、ねらい等の共有理解
・授業づくりと授業の評価方法

学部ごとに柱②から取り組む内容を選択し、研究、検証する。また自立活動6区分27項目の視点で学部ごとに児童生徒の実態把握を行う。授業でのグルーピングや自立活動の視点での児童生徒の実態把握、指導案作成の際に集団の実態表を活用する。実態表の有効な活用の方法の検証、学部ごとの授業内容の整理改善を本研究の目的とする。

4 研究期間と流れ



5 研究方法

- (1) 学部毎に取り組み内容を選択し、各学部で計画的に研究を進める。（学部外の教員は、原則年間を通して、積極的に各学部の研究に参加する。）また自立活動 6 区分 27 項目の視点で児童生徒の実態把握を行い、シートの活用方法を検討、検証する。
- (2) 各学部、学年ごとに取り組みテーマをさらに具体化し、授業等の計画および実践をする。
- (3) 研究授業実施後には、学部ごとに研究協議会を設定し、ねらいを達成するための効果的な方法等について協議する。
- (4) 研究協議会は、可能な範囲で総合教育センターの指導主事を招聘し、研究に対する助言を受ける。
- (5) 授業の実践や、研究協議会における意見を集約し、研究成果をまとめる。

6 研究成果の発信

- (1) 研究紀要（1年目は学部ごとに「中間報告のまとめ」を作成し、中間報告会を行った）
 - ・研究成果を文書としてまとめたものを研究紀要とする。
- (2) 研究報告会及び報告
 - ・研究紀要を基に、校内へ研究成果を共有する場として研究報告会を行う。
 - ・研究紀要は、特別支援教育課、神奈川県特別支援学校各校に送付する。

2 月	8 日（水）	研究報告会	校内教職員対象（外部講師の招聘の検討）
3 月	1 日（水）	研究日⑩	反省および次年度校内研究テーマ等の検討

7 研究成果

自立活動の視点による児童生徒の実態把握を各学部で行い、学年、学習グループごとに実態表を作成した。実態表を基に授業における児童生徒の自立活動の目標ねらいの整理を行なった。また研究授業者の指導案に実態表を活用することで授業内でのグループ分けや自立活動の視点における目標設定をする根拠となり、実態把握、授業のねらいの整理を進めることができた。

令和 4 年度は継続して実態表の活用の検討と、学部ごとに取り組みテーマを選択し授業改善に取り組んだ。実態表の活用については、年度初めに実態表活用の指導案について年次研対象者と情報共有を行い、自立活動の視点での実態把握、目標設定の流れの確認を行った。

学部ごとの授業改善については、授業振り返りツールの拡充や指導案の改良、教科を絞った日々の授業実践等に取り組んだ。また中間評価として学部ごとに指導主事を招聘し、研究に対する助言を頂いた。取り組み内容については学部ごとに研究のまとめを作成し研究報告会で全校教職員に共有した。

肢體不自由教育部門

小学部

研究テーマ

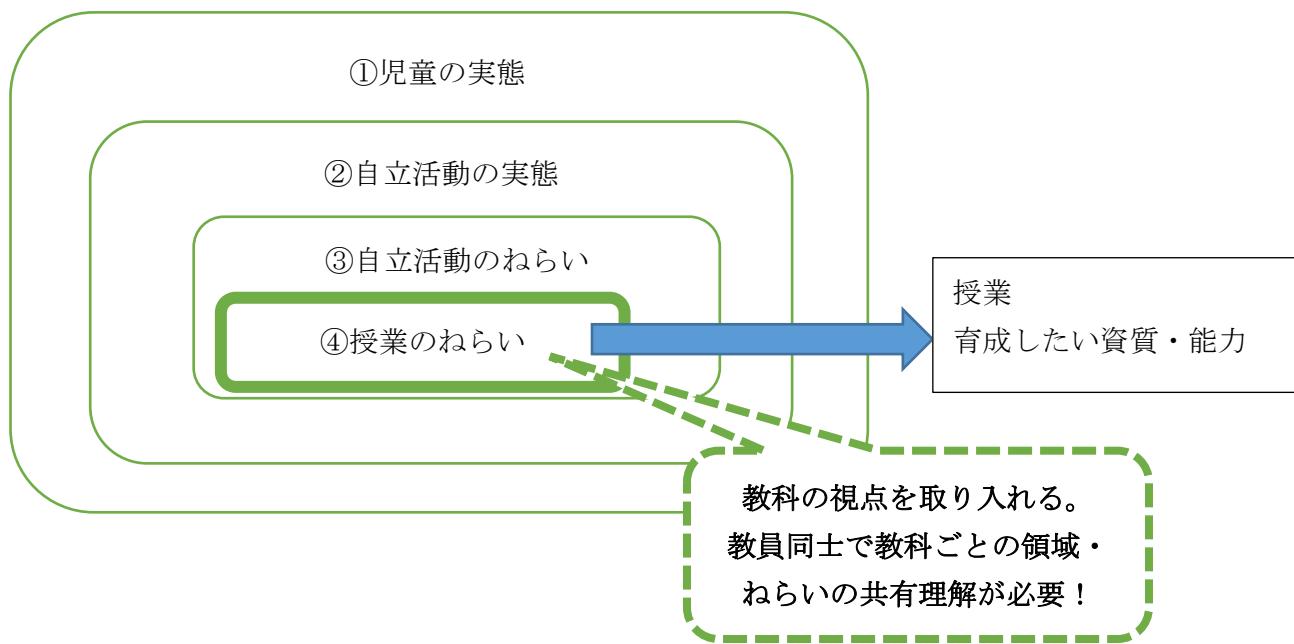
教科ごとの領域・ねらい等の理解共有

1. 研究テーマ設定の理由

昨年度は「集団としての実態把握をもとにした授業の計画・実践を通して」をテーマにして研究に取り組んだ。自立活動の6区分27項目に沿って各学年で話し合い、実態表を作成した。さらに集団授業の指導略案にその実態表を入れ授業を実施した。その結果、自立活動の目標が多くなってしまうために目標を絞ること、また、「何ができるようになるか」の視点が不足していることが課題として挙げられた。

そこで今年度は、授業のねらいを明確にするために必要なことはなにか考えた。教科の視点を取り入れ、教員同士が共有理解することによって、自立活動の目標を絞り、授業のねらいも明確にできるではないかと考え、今年度のテーマを設定した。授業のねらいを設定するためには、自立活動の実態、ねらいも必要となると考え、昨年度作成した実態表は、引き続き活用していくことにした。

〈授業のねらいを明確にするための考え方〉



2. 研究の方法

教科ごとの領域・ねらい等を教員同士で話し合っていくことにしたが、全授業での研究は難しいため、今年度は生活と体育（運動）の授業に絞り、研究内容によっては縦割りになるようメンバー編成を行い、研究していくこととした。

3. 研究の実際

初めは、学級ごとに昨年度の実態表の見直しを行った。実態表をもとに、年間指導計画の各単元を自立活動の6区分27項目に振り分けた。自立活動の目標が、年間を通してバランスよく配置されていることを確認した。

次に教科ごとの領域・ねらい等を教員同士で共有するためには、指導略案にねらいを盛り込むことが必要と考えた。指導略案に、教科の段階・内容の記入を加えるなどの改善を行い、その指導略案をもとに授業を実施し、学級ごとに振り返りを行うこととした。

指導略案に指導要領の段階、内容を記入していくことによって、1～6年生まで多く取り組む内容がある一方で、取り組みが少ない内容があることに気づいた。そこで、全学年での指導要領の生活科の内容（ア）～（シ）までの12項目、体育科の内容（A）～（G）までの6領域の一覧表を作成し教員同士で共有することにした。

4. 研究成果と今後の課題

昨年度の課題を踏まえ、以下のように指導略案を改善して授業を実施し、振り返りを行うことで授業改善を行ってきた。今回、授業をどのように改善されたかがわかるよう振り返りを含め、生活、体育ともに同単元の指導略案で説明する。指導略案の改善が、目標を絞り、「なにができるようになるか」につながることができたかも合わせて考察していく。

【指導略案の改善した点】

- ①実態に即したねらいであるかを明確にするため、自立活動のねらいを組み込む。
- ②授業のねらいを教科のねらいと捉え、教科名、段階、内容を記入する。
- ③育成を目指す資質・能力を明確にする観点から、授業のメイン活動が、三つの柱「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力」「学びに向かう力、人間性」のどの育成を目標としているか記す。

(1)授業改善の実際（生活）

次に初めに生活の指導略案を2つ見比べてもらいたい。6年生の「友だちとボール遊びをしよう！」の単元での指導略案である。2回目の授業で改善された部分は波線をついている。

学部 小学部	学年 6年	場所 小6年教室	担当 濱崎
授業日	令和4年9月7日 (水) 10:40~11:20		
授業名	生活 友だちとボール遊びをしよう！		
自立活動のねらい	<ul style="list-style-type: none"> 保有する感覚の活用に関するこ コミュニケーションの基礎能力に関するこ 		
授業のねらい	<ul style="list-style-type: none"> 投球台からボールを転がすことができる (生活1段階ア 内容:エ遊び(ア)) 友だちが転がしたボールに触れたり押し返したりすることができる (生活1段階ア 内容:オ人との関わり(イ)) 		
時 間	活 動 内 容	評価の観点	
10:40	導入『みいつけた』 ・タマゴパックをさわる		
10:43	1 はじまりのうた『はじまるよ』 2 はじまりのあいさつ ・MTの方を向き、授業の始まりを意識できるよう にする		
10:47	3 ボウリング遊び ①見本を見る。 ②円陣の中心にピンを並べる。 ③投球台を使ってボールを転がす。 ※ボールは音が鳴るバレーボールを使用する。	<ul style="list-style-type: none"> 自分からボールを転がすことができたか。 <div style="border: 1px solid black; padding: 2px;">知識・技能</div> <ul style="list-style-type: none"> ピンが倒れる様子に気付くことができたか。 	
10:57	4 円陣ボールパス ①1番目児童がボールを友だちに向かって転がす。 ②ボールをキャッチ、または触れる。押し返す。 ③全員がボールに触れるまでパスを続ける。	<ul style="list-style-type: none"> 友だちに向かってボールを転がすことができたか。 <div style="border: 1px solid black; padding: 2px;">思考力・判断力・表現力</div>	
11:07	5 パラバルーンボール遊び ①円陣でパラバルーンを教員と一緒に持つ。 ②やりたい順番にボールをパラバルーンの上に転がす。 ③ボールを落とさないようにボールに触れたり押し 返したりする。	<ul style="list-style-type: none"> 転がってきたボールに触れたり押 し返したりすることができたか。 <div style="border: 1px solid black; padding: 2px;">遊びに向かう力</div>	
11:15	6 振り返り		
11:20	7 おわりのあいさつ		

<実施後>

小学部

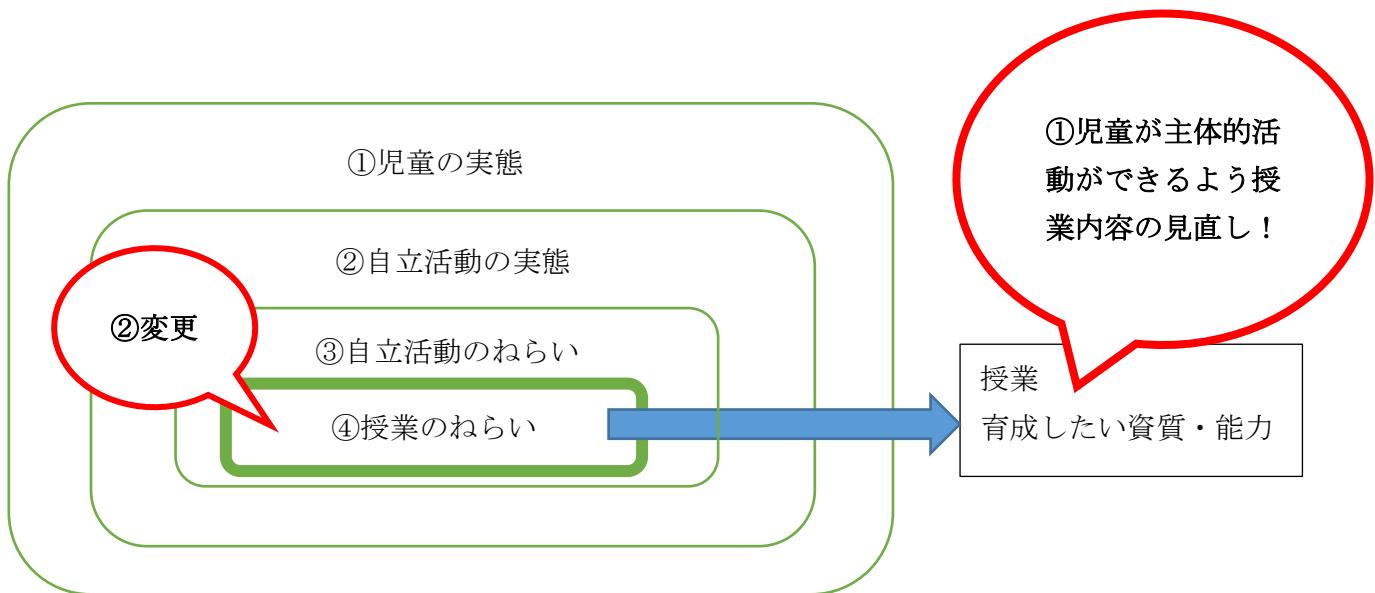
学部 小学部	学年 6年	場所 小6年教室	担当 濱崎
授業日	令和4年9月14日 (水) 10:40~11:20		
授業名	生活 友だちとボール遊びをしよう！		
自立活動のねらい	<ul style="list-style-type: none"> 保有する感覚の活用に関するこ コミュニケーションの基礎能力に関するこ 		
授業のねらい	<ul style="list-style-type: none"> 自分でボールを押したり転がしたりするこができる（生活1段階ア 内容：エ遊び（ア）） 自分に転がってきたボールに触れるこができる（生活1段階ア 内容：オ人との関わり（イ）） 		
時 間	活 動 内 容	評価の観点	
10:40	導入『みいつけた』 ・タマゴパックをさわる		
10:43	1 はじまりのうた『はじまるよ』 2 はじまりのあいさつ ・MTの方を向き、授業の始まりを意識できるよう にする		
10:45	3 円陣ボールパス (BGM: <u>WIDING ROAD</u> クラシック ver) ①1番目児童がボールを友だちに向かって転がす。 ②ボールをキャッチ、または触れる。押し返す。 ③時間いっぱい(5分半)ボールパスを続ける。 ④休憩 (BGM:ハイ・ディドゥル・ディー・ディー) ⑤円陣ボールパス2回目①~③	<ul style="list-style-type: none"> 友だちに向かってボールを転がす こができるか。 <div style="border: 1px solid black; padding: 2px; text-align: center;">思考力・判断力・表現力</div> <ul style="list-style-type: none"> 転がってきたボールに触れたり押 し返したりするこができるか。 <div style="border: 1px solid black; padding: 2px; text-align: center;">知識・技能</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 2px; text-align: center;">学びに向かう力</div>	
11:00	4 パラバルーンボール遊び (BGM: <u>愛をこめて花束</u> を~クラシック ver) ①円陣でパラバルーンを教員と一緒に持つ。 ②やりたい順番にボールをパラバルーンの上に転がす。 ③ボールを落とさないようにボールに触れたり押し 返したりする。		
11:07	5 振り返り		
11:15	6 おわりのあいさつ		

(2)振り返りと改善した点

9月7日の授業の振り返りでは、児童の授業での様子が多く話し合われた。活動の見通しが持ちにくいこと、活動の終わりがわかりにくいこと、活動が多いのではないかなどの意見が出た。そこで、活動内容を見直し、児童が主体的に活動できていた円陣パス、パラバルーンの活動内容を充実させることにした。細かい姿勢や配置、授業の終わりの合図としてのBGMの意見も出たので、それも授業に反映させることにした。

活動内容を見直し、メインの活動を円陣ボールパスに絞ったことにより、授業のねらいの見直しも行われ、児童の主体的な活動を目指したねらいが設定された。

今回の振り返りでは、児童の活動の見直しを行ったところ、授業のねらいが変更になったが、自立活動のねらいは変わらなかった。これは指導略案の授業のねらいがかなり絞られ具体的であり、授業の活動に沿った内容であったためと考えることができる。



(3)授業改善の実際（運動）

次は1年生の「バランス遊び」指導略案である。こちらも2回目の授業で改善された部分は、波線をついている。

<実施前>

小学部

学部 小学部	学年 1年	場所 教室	授業者 山崎
授業日	令和4年9月21日 (水) 10:30~11:10		
授業名	<運動> バランス遊び		
自立活動のねらい	<ul style="list-style-type: none"> 保有する感覚の活用に関するこ 姿勢と運動・動作の基本的技能に関するこ 		
授業のねらい	<ul style="list-style-type: none"> 手足を動かしてバランスをとる。<体育1段階A 体つくり運動遊びア> かけ声に合わせて身体を動かす。<体育1段階B 器械・器具を使っての遊びウ> 		
時 間	活 動 内 容	評 価 の 観 点	
10:30	<ul style="list-style-type: none"> ○はじめのあいさつ ○準備体操 手（右、左）→足（右、左）を動かす。 手足をくるくる回したり、ぶんぶんふったりする。 ○活動内容を知る 		
10:45	<ul style="list-style-type: none"> ○バランス遊び ①バランスボール ②ピーナッツバルーン 上に座る。 上下に跳ねたり、左右に揺れたりする。 右、左等かけ声に合わせて一緒に行う。 ③円盤シーソー 仰向け、座位で乗る。 前後左右に揺れる。 音楽が終わって交代 	<ul style="list-style-type: none"> それぞれの方法で器具に乗ることができたか。 <p>知識・技能</p> <ul style="list-style-type: none"> かけ声を聞きながら取り組むことができたか。 <p>思考力・判断力・表現力</p> <ul style="list-style-type: none"> 手足を動かしたり、身体に力を入れたりして、バランスをとろうとすることができたか。 <p>思考力・判断力・表現力</p>	
11:00	<ul style="list-style-type: none"> ○ふりかえり 今日の活動の振り返りを発表する。 		
11:10	<ul style="list-style-type: none"> ○おわりのあいさつ 		

学部	小学部	学年	1年	場所	教室	授業者	山崎	
授業日	令和4年9月28日(水) 10:30~11:10							
授業名	<運動> バランス遊び							
自立活動のねらい	<ul style="list-style-type: none"> 保有する感覚の活用に関すること 姿勢と運動・動作の基本的技能に関するこ 身体の移動能力に関するこ 							
授業のねらい	<ul style="list-style-type: none"> 手足を動かしてバランスをとる。<体育1段階A 体つくり運動遊びア、イ> かけ声に合わせて身体を動かす。<体育1段階B 器械・器具を使っての遊びウ> 							
時間	活動内容				評価の観点			
10:30	○はじめのあいさつ ○準備体操 手(右、左)→足(右、左)を動かす。 手足をくるくる回したり、ぶんぶんふったりする。 ○活動内容を知る ○自分が乗るものを探る ○バランス遊び <u>※()内 器具を行う児童</u> ①バランスボール (01、04、05) ②ピーナッツバルーン (02、03) 上に座る。 上下に跳ねたり、左右に揺れたりする。 右、左等かけ声に合わせて一緒に行う。 ③円盤シーソー (02、03、05) 仰向け、座位で乗る。 前後左右に揺れる。 ④平均台 (01、04) 平均台の上を歩く。(前向き、横向き) 音楽が終わって交代 児童がバランスをとることを促すために、大きく揺らす、支援を最小限にする。							
10:45					<ul style="list-style-type: none"> それぞれの方法で器具に乗ることができたか。 <p>知識・技能</p> <ul style="list-style-type: none"> かけ声を聞きながら身体を動かそうとすることができたか。 <p>思考力・判断力・表現力</p> <ul style="list-style-type: none"> 手足を動かしたり、身体に力を入れたりして、バランスをとろうとすることができたか。 <p>思考力・判断力・表現力</p>			
11:00								
11:10	○ふりかえり 今日の活動の振り返りを発表する。 ○おわりのあいさつ							

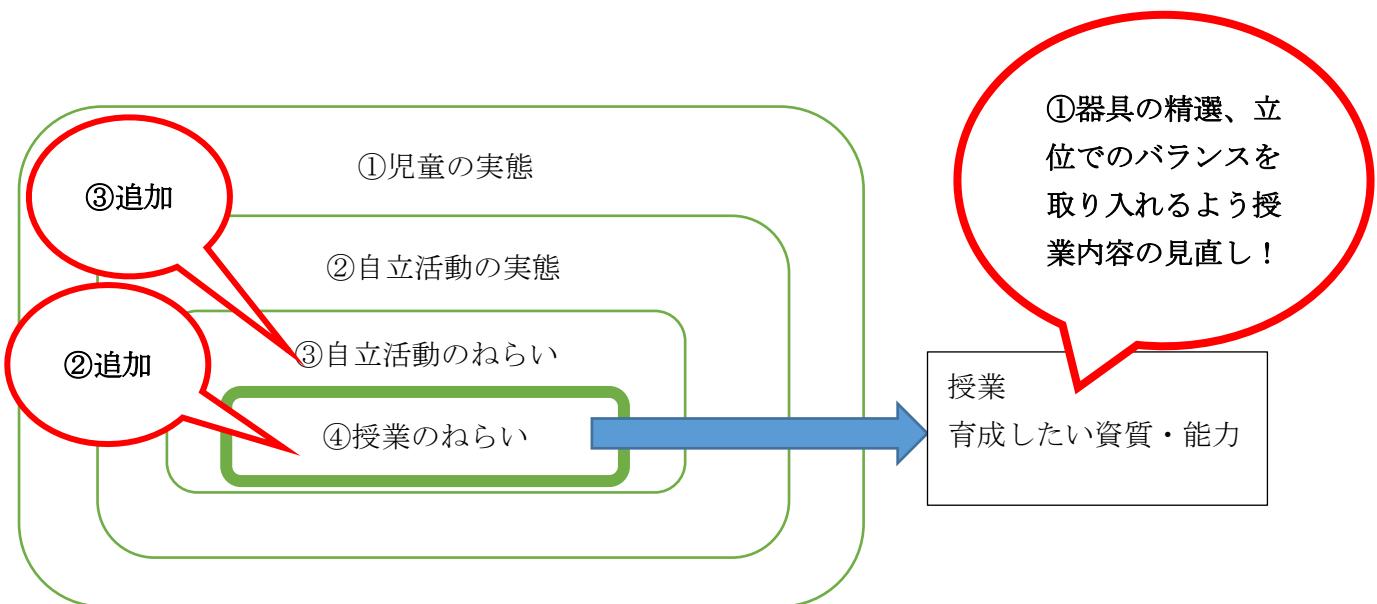
(4)振り返りと改善した点

この時の振り返りと授業改善された内容について記述する。

9月21日の振り返りでは、「バランス遊び」の単元で立位姿勢での活動を取り入れたいこと、児童がやりたくなる器具が多いため、一つ一つの器具での活動時間が短くなってしまったこと、教員と一緒に活動でも児童自身がバランスを取れるようにしたいと3つの意見が出た。

そこで、活動の見直しが行われ、立位でバランス遊びができるように平均台を活動に加え、児童の使う器具を教員同士で話し合ったものを事前に決めておき、こちらから指定することにした。また、児童自身がバランスを取っていることが実感できるように大きく揺らすように揺らし方を変えることにした。

振り返りでは、児童に応じて器具を精選し、新たに立位姿勢での活動を取り入れることにした。それによって活動が見直され、授業のねらいに、体育科の目標の追加がなされ、自立活動のねらいにも、新たなねらいが追加された。こちらの指導案では、教科の視点と自立活動のねらいがつながっていたため、活動の見直しによって、授業のねらいに大きな変更はなかったが、教科の目標が追加された。それに伴い自立活動のねらいの追加にもつながったと考えられる。



〈研究の成果〉

今回、昨年度の課題を踏まえ、授業改善として指導略案の改善を行った。授業のねらいに教科の視点を取り入れたことによって、授業のねらいを絞ることにはつながった。また、昨年度作成した自立活動の実態表を活かし、実態に即した自立活動のねらいを設定することもできた。また、メインの活動に3つの柱を取り入れたことにより、ねらいの設定が活動に沿った具体的なものになったと思われる。

だが、全学年の教科の内容を記入した指導略案を見ていくと、内容に偏りがあるのではないかとの意見があった。そこで、生活と体育の授業の1～6年の年間の活動内容を一覧に検討することにした。

生活の活動内容一覧（初めの数字は学年を表す。例①は1学年、②は2学年）

内容	学年・単元名		
	1段階	2段階	3段階
ア 基本的生活習慣	④⑤手洗い		
イ 安全			
ウ 日課・予定	⑥6年生のまとめ		
エ 遊び	①ゲーム、お祭り屋台、遠足、季節の行事 ②お祭り屋台、節分、二人組になって運ぼう ④⑤ゲーム活動、お話あそび ⑥ボールあそび、正月あそび、豆まき		
オ 人との関わり	①学校探検、お祭り屋台 ②母への感謝・父への感謝、挨拶、二人組になって運ぼう ④⑤年賀状づくり ⑥ボールあそび		
カ 役割	①劇遊び ④⑤お話あそび		
キ 手伝い・仕事	①そうじ・洗濯 ④⑤栽培学習、洗濯、大掃除 ⑥お手伝いをしよう		
ク 金銭の扱い	①お祭り屋台 ②お祭り屋台 ④⑤宿泊学習 ⑥修学旅行		
ケ きまり	①ゲーム ⑥校外学習、遠足		
コ 社会の仕組みと 公共施設	①校外学習、遠足 ②校外学習 ④⑤校外学習、宿泊学習、遠足 ⑥校外学習、修学旅行		
サ 生命・自然	①栽培、雨降り体験、足湯、七夕、焼き芋、季節の行事、2年生に向けて ②春を探しに、栽培、冬の飾り、書初め、節分、3年生に向けて ④⑤栽培学習、よもぎ団子づくり、落ち葉あそび、年賀状づくり ⑥季節を感じよう春・秋、夏の遊び、七夕祭り、さつまいもの収穫に向けて、栽培、豆まき		
シ ものの仕組みと 働き	④⑤光遊び、凧揚げ		

体育（運動）の一覧

（初めの数字は学年を表す。4・5・6年のA、B表記は、単元によって合同でA、Bの2グループに分かれて授業を実施していたため、アルファベットでの表記がある。）

領域	1段階	2段階	3段階
A 体つくり運動遊び	①準備運動、ペットボトルロケット、バランスボード、棒遊び、サーキット ②ポキポキ体操 ④⑤⑥B 準備体操	④⑤⑥A 準備体操	
B 器械・器具を使っての遊び	①揺れ遊具、キャスターボード、ボールスライダー、大型遊具 ②大型遊具、築山滑り、滑り台、シーソー、ハンモック、ボールスライダー、バランスボード ④⑤⑥B エアートランポリン、揺れ遊具 ⑥吊り遊具		
C 走・跳の運動遊び	①サーキット ②サーキット運動 ④⑤⑥B サーキット	④⑤⑥A サーキット	
D 水遊び	①水遊び ②プール、水遊び ④⑤⑥プール、水遊び		
E ボール遊び	①ボール遊び ②サッカー ④⑤⑥サッカー	④⑤⑥A サーキット	
F 表現遊び	④⑤⑥B 揺れ遊具		
G 保健			

※領域名は、1段階のもの

一覧にしてみると、今回、生活の授業では「イ 安全」をメインに取り扱っている単元がなかった。だが、ここでの内容としては、「教師と一緒に様々な活動を体験し、危ない遊び方や場所について気付くことが大切」とされていて、個別での課題の授業では、身の回りの道具や玩具の危険性や、階段や段差などを注意して歩くことなどを学習したり、校外行事の事前学習などで信号や道路の歩き方を学習したりする授業は実施されている。また、避難訓練は学校全体で行われている。つまり、一覧で見ると、生活の授業では単元のメインの活動内容としての全学年とも取り扱いが見られなかつたが、児童が「イ 安全」の内容を学習していないわけではない。

運動の授業でも、「G 保健」は全学年単元として取り扱いが見られなかつた。学習指導要領では、指導内容の例えとして、「遊びのあとに「かお」、「むね」、「せなか」といった言葉に触れなが

ら汗をぬぐったりすること」「体調が悪い時やけがをしたときに、教師と一緒に保健室に行くなどして保健室の雰囲気に慣れ、自らの変化に気付いて、教師にことばや表情、サイン、絵カードなどで伝えられること」などが挙げられている。これらの活動も、運動の授業でメインの単元として取り扱っていないものの、学校生活や個別の課題の授業時に実施している。

今年度の教科の内容の一覧を作成してみると確かに偏りは見られたが、メインの単元として取り扱っていないが、学習しているものが多くあることも分かった。そのため、一覧の内容・領域の欄全部を埋めるよう単元を設定することよりも、児童の実態や学年に応じながら、育成したい資質・能力を考えて学習内容を計画していく必要を感じた。また、各学年似た単元も多いため、どのように系統性を持って学習していくかも小学部全体で話し合っていくことも必要であると考える。今後、授業をよりよいものにしていくためにも、学部で系統立てて学習できるように授業内容を話し合える機会を設定していきたい。

肢体不自由教育部門

中学部

研究テーマ

授業振り返りツールの活用と検証
～ソーシャルコミュニケーション（通称SC）の授業を通して～

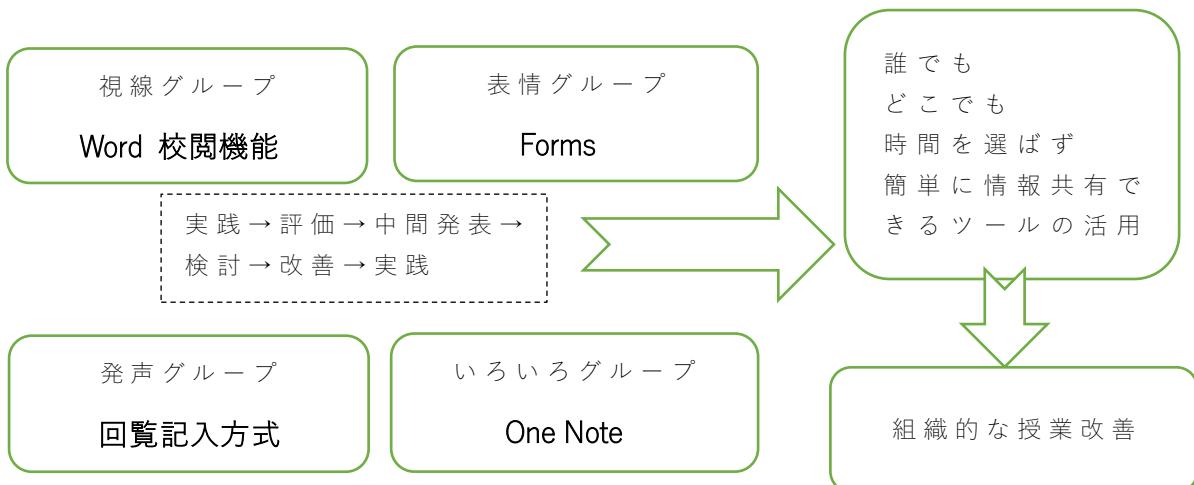
1. 研究テーマの設定の理由

昨年度は「指導集団が個々の実態を共有しやすくすることで、生徒一人ひとりのねらいが明確で学びや活動が充実した授業づくりができる」という仮説のもと、自立活動6区分27項目の一覧を使い集団の実態表を作成共有することにした。学部縦割りの授業や学年での授業で実態表を活用し、これをもとに授業内容や支援方法を考え、実践し、振り返りと改善をしてきた。その結果、表を使うことでねらいが共有でき、話し合いの機会となったことは有効であったが、どのような支援が必要なのか実態表だけではわからないこと、組織的な授業改善のために何を共有すべきなのか明確にしていく必要があるという意見が出た。そこで、個々の実態やねらいを共有するためのツールの利用と、それらを共有する時間の確保などを検討する課題があることから、授業の振り返り方法をさまざまなツールを活用して実践し、授業改善につなげていくことを今年度のテーマとした。

2. 研究方法

今年度はソーシャルコミュニケーション（通称SC）の授業を、生徒の伸ばしていきたい表出方法という切り口で4つのグループに分けた。生徒の得意とする表出方法、伸ばしていきたい表出方法がグループで共通していることで、より明確にねらいを共有しやすく、そのグループ内で各ツールを活用しながら授業の振り返りを積み重ねていくことでそれぞれのツールの特徴を活かしながら授業改善につながるよう研究を進めた。ツールは教員の働き方が多様化している昨今の実情を踏まえ、グループごと4種類の方法（One Note、forms、Word校閲機能、手書き）を採用した。これは、校内にいなくても振り返り、情報共有ができるオンラインツールの可能性も含めて実践と検証を行った。

中学部では日常的にteamsチャットで諸連絡をしたり、One Noteで会議録を入力したり、Wordの校閲機能を使って個別指導計画を作成したりとオンライン化を進めていく中で効率よく業務を進められてきている。そのことからも、これらを活用していく中で“誰でもどこでも時間を選ばず、簡単に情報共有できるツール”を検証し、今後日常的に活用できるツールを探ることで業務の効率化を図るとともに、より充実した情報共有がされることによって子どもたちにとってもわかりやすく楽しめる授業になるよう組織的な授業改善につなげていきたい。

**3. 研究の実際**

次頁より各グループで実践してきたツールの活用について示す。

① グループ名：キャッチアイ（視線）

② グループの目指すところ（表出方法）

二択以上の選択肢から興味のある方に視線を向けて自身の意思を表出したり、提示物が目の前に来た時に視線を動かして興味があることを伝えたりするなど、実態に合わせた方法で視線の向きや動きを使って意思を表出すすることをねらいとした。

③ 使ったツール：Word校閲機能

④ ツールの使い方、方法、及び解説

Word校閲機能を使って、授業後に各自でオンライン上の指導案に振り返りやコメントを書き込む。誰がコメントしたかWord上で記録される。指導案をベースに生徒の様子や次回の目標などを書きこめるように様式を作り、毎時更新した。

前回からの改善点			
<ul style="list-style-type: none"> 回転数確認提示物（カードサイズ） →黒板に貼れるよう、裏にマグネットシート付けます。 全員にバランスよく回ってくるといいと思った…！ →自分の前に爆弾を持っていた人のカードは、選択肢に入れないと。 			
中学校部	1～3年	場所	中2-1教室
授業日	令和4年6月23、30日、7月7日、7月13日（木）10:40～11:20		
授業名	S C ゲームを選んで遊ぼう～やりたいことを伝えよう～爆弾ゲーム編（全5回）		
授業のねらい	<ul style="list-style-type: none"> 視線で2つの選択肢からどちらかひとつを選ぶ。 やりとりをする楽しさを味わう。 グループのみんなでゲームをすることやゲームの雰囲気を楽しむ。 		
時間	活動内容	指導上の留意点・配慮事項（UD化△、合理的配慮▼）	
10:35	<p>①はじめに</p> <ul style="list-style-type: none"> はじまりの挨拶をする。 SC始まりの歌を歌う。 出席をとる。 チームのダンスを鑑賞する。 本時の流れを確認する。 	<p>△MTに注目しやすいようなポジショニング等、個々に応じて行う。</p>	<p><準備物></p> <ul style="list-style-type: none"> iPad サングラス 生徒写真 ホワイトボード 流れ用の提示物
10:40	<p>②なにやるの？</p> <ul style="list-style-type: none"> 爆弾ゲームの説明を受ける。 顔写真を使い、どの教員と一緒にやるのかを視線で決める。 	<p>△カードや実物を提示して活動内容を伝える。</p> <p>△提示物を見せる際に、黒板等を背景にする。</p> <p>△見本を見せたり、手本を示したりして手順を示す。</p>	<p><準備物></p> <ul style="list-style-type: none"> 教員写真
10:50	<p>③やってみよう！</p> <ul style="list-style-type: none"> 爆弾ゲームをやる。 爆弾を渡す相手を、顔写真を使って視線で選んで渡す。 音楽が止まった時点で爆弾を持っていた生徒は自分の回転回数を、選択し、その回数分その場で回転する。 	<p>△ゲームごとに、表出にかける時間を十分に確保する。</p> <p>△回転数を選択するための提示物は多い、少ないが視覚的にわかりやすいものを利用する。</p> <p>△自分の前に爆弾を持っていた人のカードは、選択肢に入れないと。</p>	<p><準備物></p> <ul style="list-style-type: none"> マグネット付き回転数確認提示物（カードサイズ）
11:10	<p>④ふりかえり</p> <ul style="list-style-type: none"> 本時の様子、頑張ったことを一緒に爆弾ゲームをした教員と一緒に発表する 	<p>△本時の生徒の様子を共有する。</p> <p>△次回以降の目標案等が出ればそれらも共有する。</p>	

※前回からの改善点

改善した点にマーカー

山崎 純子
平島さんが一人一人の目標を明確に伝えてくれたことはよかったです。担当が変わってもわかりやすいです。

平島 孝太郎
ありがとうございます。続けていきたいと思います。

平島 孝太郎
生徒の待ち時間が少し長かったですかね？
人数が多いときは爆弾を2つにしてみてもいいかもしれないと思うのですがいかがでしょうか？
体操的に嬉しいですかね？

小笠原 有美映
2ついいですね！ボードやカードの準備が大変でなければやってみましょう！

小笠原 有美映
あまり対応したことがないので、1508の対応をどうしたらよいか迷ってしまった。
他の生徒も子うですが、動作や発言の表出の保し方法

授業後、気になった指導内容や改善した方が良いことなどを校閲でコメント

1601	教員を選ぶ場面では、写真ではなく教員自身を見て選択することが多かった。写真を見て選ぶように言わ れていることは理解している様子なので、指示通りに写真を見て選ぶことができるよう徹底し、指示され た場所を見て選択することを目標にしたい。』
次回の目標	・指示された写真を見て教員や友だちを選択する。 ・選択肢に「存在しない人」が入った状態で、多数の選択肢から適切な人物を視線で選ぶ。』
1602	左側に選択肢を提示する。左右よく見比べて選ぶことができた。視線で選んで表情で答える。3つの選択肢 から選ぶにしても良い気がするが、再度2択で様子を見たい。』 左右反転させても同じものを選ぶか試したい。』
次回の目標	・2択から左右反転させても同じものを選ぶ。』
1608	今日は、選択肢をよく見ていた感じがあった。力が入ることははあるが、落ち着いている。』
次回の目標	一度選んだものを、入れ替えて同じものを選ぶ。』
1505	上向きの視線のほうが見やすいようで、上下縦にカードを並べると上方を見ることが多いようである。や や上方に左右でカードを並べて提示する方が見やすく、選びやすいようだ。』
次回の目標	やや上方で横に2枚のカードを並べた状態で視線を使って選択する。』
1508	2択の選択は覚醒していれば、はっきり選ぶことができた。左右反転させても同じものを選ぶことができた。 次回も同じようにやってみて、選択できるか試したい。』
次回の目標	・2つの選択肢から選ぶ。 ・左右反転させても同じものを選ぶ。』
1405	右前方で選択肢を示すというやり方を、やりながら他の先生に教えてもらえてよかったです。どちらもよくみて いたが、選択することが難しい印象。その場で、選択するときに手をタッチしてはどうかと考えてやってみ たが、どちらでも手が出てきた。彼自身の注視の方法があれば、その場で言葉かけしながら共有したい。視 線だけで選択できるように次回も取り組んだほうがよいと反省した。』
次回の目標	選択肢3つの中から視線で選ぶ。』

授業中の各生徒の様子を記録、次回の目標を設定する。

次回の改善点	・平島さんが、一人一人の目標を明確に伝えてくれたことはよかったです。担当が変わってもわかりやすいです。 →この際に生徒一人一人の本時の目標を簡潔に共有する。
	・生徒の待ち時間が少しの本時の目標を明確に伝え、共有する。(継続) し長かったですかね? 人数が多いときは爆弾を2 つにしてみてもいいかもしれませんと思うのですがいかがでしょうか? 体制的に厳しいですかね?』 →爆弾、カード、ボードを2つずつ準備し、生徒の人数に合わせて爆弾を2つ使ってゲームを進行する。
	・あまり対応したことがないので、1508の対応をどうしたらよいか迷ってしまった。他の生徒もそうですが、発作や普段の 表出の促し方法について改めて共有する時間が欲しい。』 →グループでの打ち合わせ時に、授業で実際にあった場面を考慮したうえで、改めて生徒一人一人の実態、対応方法等を共 有する。』
	・振り返りをするときに、今日の目標を振り返って達成できたかを含めて話せると評価しやすいです。最初の目標を忘れて しまうので。』 →振り返りの際に本時の目標を振り返って達成できたかを含めて話す。』

MTは校閲の内容を元に次回の改善点を記入する。

↓

これが次回の指導案（※前回からの改善点）に記載される。

⑤ ツールのメリット、デメリット

【メリット】

- ・指導案をもとに編集を加えているため、指導案全体の流れに対して、改善した内容をより明確に共有することができる。
- ・授業回数を重ねる毎に更新した指導案が積み重なるので、振り返りや改善の変遷が見返しやすい。
- ・teams を通して好きなタイミングで編集をすることができる。

【デメリット】

- ・指導案への直接編集が主になるため、授業毎の子どもの様子を記録する場合、別欄を作る必要がある。校閲機能と子どもの記録を別欄にしてしまうことで入力が必要な項目が多くなり、教員の負担感が増える。
- ・teams に依存した情報共有になるのでパソコンがなく、teams からWordを編集することができない（スマートフォンからでは編集できる時があったりできない時があったりとteams の状態が不安定）環境の教員では指導案への編集やコメント、その後の情報共有が難しい。

① グループ名 モクサクーズ（表情）

② グループの目指すところ（表出方法）

【教員の働きかけや、刺激に対して、表情の変化で応じる。】

好きな音楽がかかると笑顔になったり、苦手な活動や刺激に対して眉間にしわを寄せたり、豊かな表情変化で気持ちを伝えることのできる生徒が多く所属している。コミュニケーションの芽生えの段階にある生徒たちであるが、様々な場面での働きかけに、より確実に、より顕著に表情の変化で応じることができるようになること目指している。

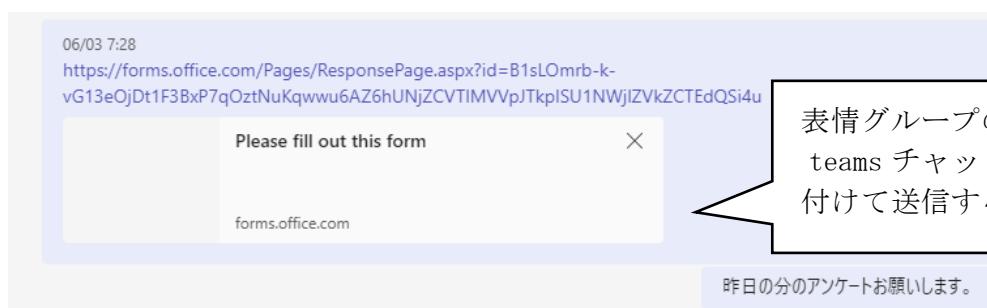
③ 使ったツール Teams Forms

アンケート作成者が、Forms でアンケートを作成→Teams に URL を張り付ける。

授業に参加した教員全員が解答→アンケート作成者が、集計結果の URL を Teams に張り付ける。

④ ツールの使い方、方法、及び解説

【アンケート作成者】



【アンケート回答者】

4. ボウリングのピンが倒れた時の表出があったか *

あり

なし

5. 具体的にどんな表出だったか

回答を入力してください

回答者は、送信されてきた、URL をクリックしてリンクを開き、質問に回答する。

〈選択肢〉により提示された質問は、選びたい回答をクリックするだけで、回答することができる。

〈テキスト〉により提示された質問は、文章を入力することで回答することができる。

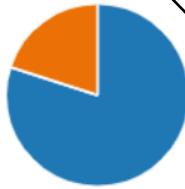
【集計】

2. オニになったとき、音楽を開始するタイミングで表出があったか (0 点数)

[詳細](#)

● あり
● なし

4
1



Forms には、回答を終えると、自動で集計し、グラフ化される機能がある。

3. 具体的にどのような表出だったか (0 点数)

[詳細](#)

5
応答

最新の回答

"首の左右の動きが大きくなった"

"ニコッと笑顔が（歯をだして）みられた"

"3・2・1の言葉かけがあると上手にタイミングよくにっこりしていた。友達の様子をよ...

⑤ メリット、デメリット

【メリット】

○回答のしやすさ

- ・どこ（自宅や通勤中の電車など）にいても回答できること、所要時間がからないことから回答しやすいツールといえる。forms には、回答にかかった時間が表示されるが平均して、どの教員も1～2分で回答を終えている。

○集計のしやすさ

- ・forms には、アンケートの回答を終えると自動で集計される機能や、集計結果が自動的にグラフに変換される機能がある。このことから、集計にかかる時間の削減につなげることができる。

【デメリット】

○他の教員の回答を確認しづらい

- ・回答のリンクを開いても、他者の回答を確認することができず、全員が回答を終えてから集計用のリンクを再度、teams チャット内に張り付けなければならない。回答用と集計結果確認用の2つのリンクを活用する必要があることで、少し手間を感じる教員が多かった。

○時系列で振り返りづらい

- ・表情グループでは、授業回ごとにアンケートを作成し集計を取っていた。そのため、その授業の振り返りをすることはできるが、単元を通しての生徒の変化など長期的な記録を振り返る際には、すべてのリンクを開く必要がある。その点で時系列で振り返る際には不向きといえる。

① グループ名 キラキラガールズ（発声）

② グループの目指すところ（表出方法）

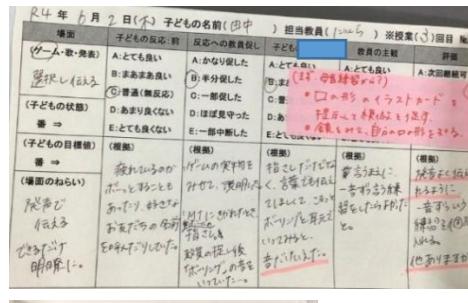
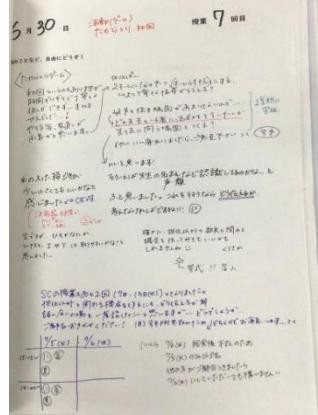
【呼名や問いかけに、発声で応えることができる。】

学級活動や休み時間に好きな音楽や言葉かけを聞くと、嬉しそうな発声・表情・身体の動きで気持ちを表出する等生徒の実態は様々であるが、注目されている場面だと、緊張や期待感が高まり発声で気持ちを表出することが難しい姿も見られる。S Cの授業では、これまで経験している活動をとおして気持ちをリラックスさせたり、自信をもって活動に参加したりすることで、呼名や問いかけに発声で応えることができると考え授業を構成している。視覚支援が必要な生徒も多いため、選択時は具体物を用いながら、問いかけに発声で応える活動を行っている。

③ 使ったツール

紙の記録票に記入→回覧→改善→実践

④ ツールの使い方、方法、及び解説

<p>❶</p>	<ul style="list-style-type: none"> 授業終了後、各生徒の記録票に担当教員が手書きで記入する。 月一回目標を立てて用紙の目標のところに書く。 <p>・改善が必要な点は、ラインを引いたり、朱書きで記入したりして、意見を求める。</p> <p>・授業全体の振り返りは、自由記述用紙に記入し、意見交換を行う。</p>	  
----------	---	---

②	<ul style="list-style-type: none"> 授業の翌日までに、ファイルに綴じる。 翌週の月曜日～水曜日で回覧する。 ラインマーカー、朱書きで記入された事項について、意見を記入する。 	
(③)	授業全体に改善が必要な場合は、会議を設け、授業改善をする。	

⑤ ツールのメリット、デメリット

【メリット】

- 一覧で生徒の実態を確認できる。
- グループ内の生徒を比較しやすい。
- 期日は決まっているが、自分のペースで記入できる。
- 共通項（特性等）を抽出しやすいため、カードのように使用できる。
- 目標が一目でわかる。
- 自由記述用紙で、教員間の情報共有ができ、授業改善を行える。

【デメリット】

- 定期的に、用紙の準備が必要である。
- 紛失の恐れがある。

① グループ名 ABC サンバ (いろいろ)

② グループの目指すところ (表出方法)

表出表現が芽生えの段階の生徒や写真カードの二択で表出する生徒、選択肢の中から答えを平仮名の文字チップを構成して表出する生徒など様々な実態の生徒がいる。表出表現が芽生えの段階の生徒は、実物やカード等を選択する活動を行う中で本人なりに表出している様子を見逃すことなく受け止め、言葉かけ等で本人にフィードバックしている。同様の経験を積み重ねていき、表出表現の確立を目指していく。写真カードや文字チップを使用して表出している生徒は、限定的な場面だけではなく、様々な場面で表出できることを目指していく。

③ 使ったツール

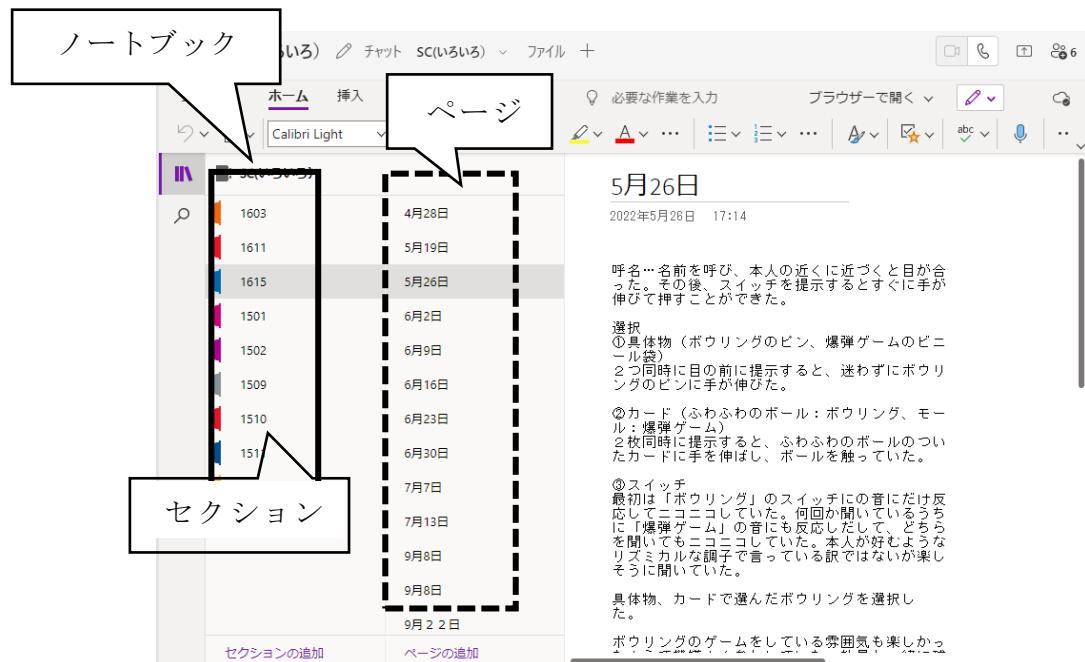
Teams OneNote

④ ツールの使い方、方法、及び解説

OneNote は自由に書き込むことができるデジタルノートと呼ばれている。

「ノートブック」「セクション」「ページ」の3つの階層構造で分けられている。

<個人ページ>



「ノートブック」はその名の通り一冊のノートと捉え、複数作成することが可能である。

「セクション」は分割されたノートブックの中身の一つずつことを指し、「ページ」は実際のノートと同じようにページ1枚ずつと捉えることができ、「セクション」「ページ」は追加することが可能である。

本研究では「ノートブック」にグループ名、生徒ごとに「セクション」、授業日ごとに「ページ」を作成して記録していく。授業の中でメインとなる活動に一緒に参加した教員が記録を記入した。また、「セクション」に振り返り、「ページ」に授業日を作成し、参加人数や授業全体の様子や改善点などを記入した。

<振り返りページ>

SC (いろいろ) チャット SC(いろいろ) ファイル +

ホーム 描画 表示 ヘルプ ブラウザーで開く

MSゴシック 11

12月8日

2022年12月14日 16:49

参加生徒 4人

1603 4月28日

1611 0526

1615 6月9日

1501 6月23日

1502 6月30日

1509 7月7日

1510 9月29日

1511 10月6日

振り返り 10月13日

12月8日

セクションの追加 ページの追加

12月8日

2022年12月14日 16:49

・参加生徒 4人

・Meetで参加生徒は、においクイズでの参加は難しいので的てをやっているグループに参加。

・1501は前回の授業で2択で匂い、名称を当てるクイズは簡単にやっていたので、今回は匂い3つと名称カード3枚を使用したクイズに挑戦した。
→名称カードもあえて読み上げず、指差しのみ。カタカナから平仮名への変換も○

・ココアの匂いに興味をもつ生徒が多かった。

・2つの匂いそれをよく嗅いでいた。

・1611は顔を左右に振って匂いをかぐ活動が難しい。

⑤ ツールのメリット、デメリット

【メリット】

- ・ペーパーレスで情報が整理しやすい。
- ・パソコンだけではなく、スマートフォン等からも入力が可能。
- ・パソコンやスマートフォン等からいつでも記録を見ることが可能。
- ・自分のデバイス間だけでなく、他の教員と共有することが可能。
- ・生徒それぞれの記録が時系列で整理されているため、個人の記録に向いている。

【デメリット】

- ・全生徒の記録を見て、教員間で授業の様子を共有するのが難しい。
- ・生徒の授業の様子に記録にとどまっており、具体的な授業改善につなげていくのが難しい。

4. 研究成果と今後の課題

情報共有のツールを一つに絞っていくことも考えたが、ツールを活用してみると、それぞれの長所・短所があるため、一概に同じ基準で評価することは難しかった。一方で、生徒の情報共有はツールの活用によって改善されたが、授業改善に対する授業そのものの情報共有がしにくいということも明らかになった。（Word校閲は情報共有と指導案が合体しているため、それ以外のツールに関する評価）

10:35	① あいさつをする	△MT「おはようございます」個人、個人にておはよう。	×運動場 ×大画面 iPad
10:37	② 本朝の学習目標を読む 1. 口のいたいそう 2. 始まりの歌（ショートVer.） 3. のであります …	ここにちは、みなさん、ここにちは、 ここにちは、みなさん、一緒に遊ぼう。 (MT) ○○ ○○○○ (生徒) はい … 次の生徒 ここにちは、みなさん、ここにちは、 ここにちは、みなさん、一緒に遊ぼう。	
10:40	③ *本時の目標を一人ひとり確認する ④ 本朝のいたいそう（カムラビングまたは、発音実習）	・感情確認のある生徒には、読み作事をしたり、言葉がけをしたりして無理なない表現をうごく。 ・始まりの歌を唱へて、的次の活動に進むを名づける。	アルコール消毒液 ヒニール袋 ヒニール袋 マイク
10:45	⑤ 始まりの歌	・始まりの歌を唱へて、的次の活動に進むを名づける。 ・始まりの歌はラフラフ!と名を有し、緊張がない雰囲気でくり返す。 ・緊張がないか出ない生徒には、スイッチの「いい」を用意し、メリハリをつける。	ゲームセット (的て、ボール、スイッチ等) 挑戦支援カード 各種物
10:55	⑥ のであります活動に参画する ⑦ のであります ・準備ででまぼう ・準備を読む MT「やりたい、だーれ?」の問い合わせがでまぼうでなれる。	△カードや实物を提示して活動内容を伝える。 △見本を見せて、手本を示したりして手本を示す。	その他の出でまぼうを引き出すために必要な支援グッズ
	・音読みを読むする	▼生徒に応じて活動の評価を考慮する。 ・電子「引き張って」♪コールをして、待機時間も含めておこせよようにしたり、おまけを詰めさせておこせよ。	引いて張って！ 引いて張って！ 3! 2! 1!!
	・投げける（2羽羽蝶）	△的的は、生徒の見やすさ直面で直ぐなど工夫をする。	
	・倒れたベットボトルを整頓 ・一人ひとりのテーマソング	・生徒に応じて、声量を保つ範囲を設定する。 ・発音等、生徒からの連携があつた場合は、大力に苦心があり、ハイタッチをしたりして自信につなげる。 ・待機の生徒は、声量で差別したり、スイッチを押して自己を差別したりする。	
11:15	⑧ 着くなり	△一緒に活動したTと感想を共有する。	

そこで、各グループで活用しているツールとは別に、Wordベースでの指導略案を各グループ内チャットで共有することとした。これは、各ツールを用いて生徒の様子など情報共有した結果を踏まえて、授業での指導方法や手だてなど変更したところをマークなどで加筆修正して元データをアップデートしていくことで授業改善を重ねた。

〈Wordでの指導略案〉

←前回の振り返りや反省を各ツールやチャット、話合いで行い、それを受けた改善したところにマークを引いて示している。

(発声グループの指導略案より引用)

また、中間報告で指導主事からの助言を受けて、インリアルアプローチの SOUL(注1)の姿勢から表出の読み取り方や授業のねらいを具体化することなど、各グループで意見交換をしてきた。授業では、各ツールで情報共有した結果を受け、本時の生徒の目標を活動前に皆で共有してから始めるグループもあり、STが変わっても生徒への支援方法や手だてなどを継続的に行うこともできた。

今回、SCの授業において各ツールを活用してきたが、自分たちのグループ以外のツールについても知りたいという声もあり、学部内研修としてそれぞれのツールについての使い方、メリット、デメリットなどを解説しあって勉強する機会も設けた。オンラインツールについては、年度途中で仕様が変わることもしばしば起きたが、気付いたときにその都度知らせながら情報共有を図ってきた。授業以外でもアンケートをとりたいときには、forms、クラス内の記録はOne Noteなど、それぞれのツールの特徴について各自の理解が深まり、学部全体で使いながら覚えていくことでより活用しやすくなってきた。

実際に時間をとて、授業改善について話し合う時間がなかなかとれないという意見はどこも共通している悩みだと思うが、それをフォローするものとして今年度活用してきた4つのツールやteamsチャットは有効であった。各ツールのデメリットはあるものの、授業改善に対するアプローチはできたと評価できる。オンラインツールの機能や仕様は日進月歩で、それに対応できるスキルも必要ではあるが、中学部だけでなく学校全体で活用していければ組織全体として、時間を有効に活用でき、より良い授業にもつながっていくのではないだろうか。

(注1) SOUL・・大人がとるべき基本姿勢

S::Silence 子どもを静かに見守り

0・Observation 子どもの興味や遊びを観察し

U・Understanding 子どもの気持ちや発達レベルや問題を理解し

L・Listening 子どもが言おうとしていることに心から耳を傾ける

肢體不自由教育部門

高等部

研究テーマ 「社会生活」の授業における自立活動の視点での再整理と授業改善

1. 研究テーマの設定の理由

昨年度までに「社会生活」の授業の「ねらい」と「ねらいを達成するためのグループごとの自立活動の視点での実態把握と目標設定」をまとめ、学部教員で共有した。

しかし、そのねらいを達成したと判断するための評価方法については現在、教員一人ひとりが生徒の様子を見て感じたことが判断の基準になっている。誰が見ても客観的に評価できる評価基準・評価方法をグループごとに深めていくことで授業改善につながると考えた。そこで、学習のねらいが明確になった「社会生活」の授業を取り上げ授業改善をテーマにした。

2. 研究方法

日々の授業が「生徒一人ひとりが社会で過ごす時に活かせる力を身につけられる授業」になるように授業改善をしながら学習指導をするために観点を明確にすることを目指す。手立てとしては、ねらいに対しての達成状況を踏まえて授業の振り返り方法を工夫し積み重ねていく。月に1回程度、教員間での振り返りの時間を設け、授業のねらいに対する生徒の評価を共有する場とし、各グループで振り返りシートや teams での情報共有、iPad で生徒の様子を撮影し活用する等を行う。グループごとの取り組みを共有しながら客観的な評価基準と個々のねらいの検討により授業改善を行っていく。

社会生活の授業について

高等部 A 1～3 年の縦割りグループでの授業である。グループ編成は自立活動の実態表を活用し、生徒の障害の状態、発達段階を踏まえて行っている。5 グループ編成だが、現在 I、II グループについては実態に合わせて活動や課題設定を行い合同で授業を行っている。

生徒の実態	ねらい
I 社会への関わりを目指すグループ	社会とのつながりを理解し、生活の中で必要な知識や技能を身に付ける。(作業的な学習をするというよりは、知識・技能・体験を積み重ねていく。)
II 友達への関わりを目指すグループ	社会とのつながりを経験して理解していく力を育む。(社会の中で生活する上で必要な知識・技能・体験を積み重ねていく。)
III-1 対教員との関わりを通して、友達のこととを意識することを目指すグループ	社会とのつながりを経験して理解していく力を育む。(社会の中で生活する上で必要な知識・技能・体験を積み重ねていく。)
III-2 教員との関わりの中で、場面に合わせた活動を目指すグループ	社会とのつながりを経験して理解していく力を育む。(社会とのつながりや社会の中で表現する経験を積み重ねていく。)
IV 社会への関わりを目指すグループ	社会とのつながりを経験して理解していく力を育む。(社会とのつながりや社会の中で表現する経験を積み重ねていく。)

3. 研究の実際

社会生活 I II グループ

実態把握シート

対象生徒：1年2名、2年1名、3年3名

グループの目標（自立活動の視点）

- ・自立に向けて必要な力や知識を小集団での体験的学習活動を通じて育む。
- ・自己及び他者への積極的関心の形成・発展を図る。

グループの実態

授業を考えるうえで意識する自立活動の視点：人間関係の形成、コミュニケーション

- ・言語でのコミュニケーションが概ね可能な集団である。
- ・いろいろな人に自分の気持ちを適切に表出すること、場面や場所に応じた言葉遣いをするなど適切なコミュニケーション能力を身に付けることを目標としている。
- ・体験的な活動を繰り返し実施することにより、社会状況や事象について関心を高め、見通しを持って取り組むことができる。

個人のねらい

	A：個別教育計画の重点目標（自立活動の視点）	Aをもとに立てた授業のねらい（自立活動の視点）
A	いろいろな人と話すことができる。	自分の気持ちを伝えることができる。
B	自己理解を深める。	自分の意見を伝える。
C	適切なコミュニケーション能力を身に付ける。	わからない時に伝えたり、できたことを報告したりできる。
D	場面や場所に応じた言葉遣いができる。 一人でできることは支援なしで行う。	気持ちの切り替えを行う。 新しい活動にも積極的に取り組む。
E	自分の考えや意見を持ち、他者に伝えることができる。	人前で自分の意見を言うことができる。
F	様々な人とコミュニケーションをとることができる。	友達とコミュニケーションをとる。

指導の手立て

- ・視覚情報の工夫
- ・繰り返しの活動体験
- ・体験的な活動により興味関心を持たせる
- ・短くシンプルな指示
- ・適切な言葉遣いの指導
- ・補助具等の工夫
- ・他学年、級外の教員や地域の方々と関わる機会の設定

(1)研究の設定理由及び進め方

初めに自立活動の実態表を用いて生徒の自立活動的なねらいを個別に整理したところ全員が集団の中でのコミュニケーション面で課題があることがわかった。そこでグループワークを各単元の授業に盛り込み、グループ編成やグループワークの内容の評価、改善を行った。教員の振り返りの時間の確保のため、OneNote を利用し、生徒の様子やグループワーク内容を共有した。

(2)授業内容及び評価

単元名 熱中症対策を考えよう		
授業の概要		
スポーツドリンク作りや熱中症の症状、対策として何が有効かを知る		
活動のねらい	手だておよび指導場面	評価および学習の様子
・グループワーク時に自分の考えや意見を、友達に伝えることができる。	<ul style="list-style-type: none"> ・I IIグループ合同でグループを作った。リーダー役を明確にし、提示した。 ・話し合い活動では自分の意見を言うことが難しい生徒が多いためドリンク作りの活動の中で、計量係、混ぜる係等役割も割り振った。 	<ul style="list-style-type: none"> ・リーダー役等、役割を明確にすることで生徒間でコミュニケーションをとりながらそれぞれ役割を担当できた。感想発表では楽しかったという意見が多く、達成感を感じられていた。 ・I、II合同で話し合い活動の場面を設定したが、IIグループの話し合いでは狙いとしていた生徒間でのコミュニケーションが難しく、生徒⇨教員⇨生徒のように教員が仲介に入る必要があった。

単元名 電気って何？		
授業の概要		
電気や電池が使われている身近な物を知る。動かないおもちゃに電池を入れて動かす等、電池の働きを知る。		
グループワークの内容		
活動のねらい	手だておよび指導場面	評価および学習の様子
・グループワーク時に自分の役割を理解し、友達にアドバイスしたり、声を掛け合いながら一緒に活動したりすることができる。	<ul style="list-style-type: none"> ・I II グループ別にグループ分けした。 ・手指の操作性に困難がある生徒をリーダー役にする等、役割分担を行った。 	<ul style="list-style-type: none"> ・リーダー役等、役割を明確にすることにより生徒間でコミュニケーションをとりながらそれぞれ役割を担当できた。感想発表では楽しかったという意見が多く、達成感を感じられていた。 ・スチールワールが光ったり、おもちゃが動いたりすることで失敗成功がわかりやすく、それぞれ工夫して行えた。

(3)成果と課題

OneNote を活用し生徒の学習の様子を記録していくことで、グループワーク内での役割設定と達成感を得られる課題設定がコミュニケーションを活発にする上で必要であることがわかった。評価方法をグループワーク内でのコミュニケーションに絞り、活動内容と手立ての見直しを行うことで評価基準を達成することができるようになってきた。実習等で教員が揃わないことが多く、グループワーク時のねらいに応じた支援方法の共有や学習の記録の活用に課題が残った。

社会生活 III-1 グループ

実態把握シート

メンバー：1年2名、2年5名、3年1名

グループの目標（自立活動の視点）

- 日常生活（家事、生活動作、地域での活動等）の体験を通して、自分なりの参加の模索をしながらできることを増やし、社会参加の幅を広げる。
- 場面に適したコミュニケーションや行動を繰り返し練習することで実際の場面でできるようにする。
- 小集団での学習の良さを活かし、友だちの活動を意識したり、自分の役割を意識したりする経験を重ねる。

グループの実態

授業を考えるうえで意識する自立活動の視点：人間関係の形成、環境の把握、身体の動き、コミュニケーション

- 具体物を見て、活動を理解して自分から手を伸ばしたり、活動に取り組んだりすることができることもある。
- 言語での指示を理解し、活動に移すことができる生徒もいる。
- 体験活動を繰り返して行うことで、見通しを持って活動に取り組み、主体的に行えることを増やし、様々なことに興味を持つことを目標にしている。

個人のねらい

	A：個別教育計画の重点目標（自立活動の視点）	Aをもとに立てた授業のねらい（自立活動の視点）
A	身体を目的を持って動かすことができる。	活動を理解して自分から手を伸ばし、取り組むことができる。
B	腕や手を使った活動で自発的な動きを引き出す。	活動を理解して自分から手を伸ばし、取り組むことができる。
C	相手の働きかけに気付き、応じる。	活動を理解して、自ら取り組むことができる。
D	色々なものに自分から触れることができる。	興味を持って、手を伸ばして触れることができる。
E	好きな活動を通して成功体験を積み重ね、できることを実感する。	見通しを持って活動に取り組み、安定した気持ちで取り組むことができる。
F	物を握ったり、放したりする。	手でつかむ時間や種類を増やす。
G	両手で物を操作する。	左右の手を使って活動に自ら取り組むことができる。
H	複数の教員との関わりを増やす。	他学年の教員と一緒に体験活動に取り組むことができる。

指導の手立て

- 繰り返しの活動体験
- 視覚情報での説明
- 体験活動を中心に行う
- 具体物の提示
- 学年を超えた担任外の教員との関わり

(1)研究の設定理由及び進め方

初めに自立活動の実態表を用いて生徒の自立活動的なねらいを個別に整理したところ、活動に見通しを持つことや様々なことに興味を持つこと、自ら取り組むことなどが課題としてあることがわかった。授業を1つのテーマにして、繰り返し行う授業を展開することとした。

授業の評価等は教員間で単元ごとに生徒の様子を振り返り、個々の生徒の評価基準の見直しと授業での目標の確認を行い、次の単元の活動内容に生かした。

(2)授業内容及び評価

単元名 トマトソース、バジルソース作り		
授業の概要 ピザ作りの中のソース作りに焦点をあて、実際に育てている野菜を使って、五感を刺激して興味関心の幅を広げ、調理器具や材料に触れられるような活動を行う。		
活動のねらい	手だておよび指導場面	評価および学習の様子
<ul style="list-style-type: none"> ・五感を通して、調理の経験を積むことができる。 ・作る工程の中で食材を触ったり、調理器具を使ったりする経験を積むことができる。 ・見通しを持って、活動に取り組むことができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ニンニクやバジルのにおいを嗅いだり、皮むきや試食をしたりして積極性を引き出す。 ・バジルやニンニクなどをミキサーに入れて、スイッチを押す活動やチョッパーの持ち手を引っ張る活動を行い、手指の動きを引き出す。 ・工程や完成品を映像や写真などで見せることで活動内容を知り、取り組みやすいような視覚支援を行う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ニンニクやバジルの香りを嗅ぐと口を動かして食欲を刺激されたような表情を見せる場面もあった。また、調理の経験として、ニンニクの皮剥きをする事に集中して取り組むことが出来たり、試食をして味覚に対する快や不快を表すことができたりしていた。 ・ミキサーに食材を入れて、上から押さえるように手を乗せると機械が動くことに興味を持ち、何度も押そうとする様子が見られた。チョッパーでは、持ち手を強く引っ張ることで回りだし、野菜が切られる感覚に興味や関心を抱き、繰り返し持ち手を引っ張る姿があった。 ・テレビで工程を見せたり、実物で完成品を見せたりすることでイメージを持つことが出来たことで、見通しを持って取り組むことが出来た生徒もいたが、テレビを観ていたが内容を理解して取り組むことが出来ていない生徒もいた。

単元名 スプーン作り		
授業の概要 木材を削るところから仕上げまでを自分たちで行い、木の感触を感じたり、木工の道具を実際に使ったりして感覚を刺激する活動を行う。		
活動のねらい	手だておよび指導場面	評価および学習の様子
<ul style="list-style-type: none"> ・様々な道具や素材を触る経験をする。 ・集団の活動を通して、教員や友達とやり取りする力を高める。 	<ul style="list-style-type: none"> ・木材、いとのこ、やすりなどの道具や素材を準備して、実際に動かして振動や感触を体験できるようする。 ・全体の指示を行いながら、個別に教員や友達と関わり、自分の気持ちや思いを表出する場面を設定する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・木材のざらざらした感覚を直接触れてずっと握る様子やすぐに離してしまった様子など様々な表出が見られた。いとのこや電動やすりの振動には、興味を持って繰り返しスイッチを押す姿があった。 ・全体の指示で道具の説明や扱い方、完成品の提示などを行なったことでイメージを持つことが出来た。個別に説明をさらにすることでやることや使い方を理解できる生徒もいた。活動の中で自分からやりたいことや終わりにしたいことなどを伝えられる場面もあった。

(3)成果と課題

年間を通して、一つのテーマに絞って活動をしていくことで何をするのかを伝えやすく、単元ごとの繋がりがより明確になり、生徒が期待感を持ち活動に取り組める様子がみられた。繰り返し行うことで授業に参加することが難しい生徒も活動に見通しを持ち落ち着いて参加できるようになった。また、複数回同じ授業展開をする中で評価を次の授業に活かして改善することもできた。単元ごとに教員間で振り返りを行い、評価基準の見直しはできたが、客観的な評価には至らず、活動内容の検討等、手立ての工夫に時間がかかった。また、授業の展開として、体験や経験をどのように主体的に行うかはこれからも検討の余地があると感じた。さらに提示の仕方なども生徒に合わせた方法を今後も考えていく必要がある。

社会生活 III-2 グループ

実態把握シート

メンバー：1年4名、2年2名、3年2名

グループの目標（自立活動の視点）

- ・刺激に対して気持ちの表出を様々な方法で他者に伝える。
- ・興味のある題材をきっかけに外界への興味関心を持てるようになる。

グループの実態

授業を考えるうえで意識する自立活動の視点：人間関係の形成、環境の把握

- ・言葉での理解は難しいが、実物や具体物を活用して学ぶことによって興味関心や理解を深めることができる。
- ・刺激に対して、表情や身体の動きで気持ちを伝えることができる。
- ・自分の目の前のものに関しては興味関心を向けることができるが、他者や周りの物に関して興味関心が薄いことが多い。

個人のねらい

	A：個別教育計画の重点目標（自立活動の視点）	Aをもとに立てた授業のねらい（自立活動の視点）
A	外界に意識を向ける時間を増やす。	友だちや前に立った教員等に気付き、視線を向ける。
B	コミュニケーションの確立を目指す。	様々な人と関わり、自分の気持ちを伝える。
C	興味関心の幅を広げ、主体的に身体を動かす。	活動の中から好きなものを見つける。
D	興味関心の幅を広げる。	様々な物に触れ、気持ちを表出する。
E	コミュニケーションの幅を広げ、主体的に学校生活を送る。	好きな活動を通して、主体的に授業に参加する。
F	好きなことを通じて、声で意思表示をする場面を増やす。	好きな活動を通して、表情や声で気持ちを表出する。
G	楽しいかかわりの中で意思表示を増やす。	様々な感触の物に触れ、意思表示をする。
H	様々な人との関わりを楽しむ。	様々な人と関わり、表情や身体の動きで自分の気持ちを伝える。

指導の手立て

- ・視覚情報の工夫
- ・繰り返しの活動体験
- ・嗅覚、味覚刺激を多く用い、興味関心を持たせる
- ・実物や映像を用いた掲示
- ・補助具等の工夫
- ・他学年、級外の教員や地域の方々と関わる機会の設定
- ・本人の表出を待つ時間の設定

(1) 研究の設定理由及び進め方

初めに自立活動の実態表や個別教育計画を用いて生徒の自立活動的なねらいを個別に整理したところ、多くの生徒が意思表示と外界との関わりの部分で課題があることが分かった。そこで、日々の授業の題材や教材に対しての生徒の反応等を振り返り、どのようなことに興味関心があるのかを整理するようにした。また、他者に目を向けることができるよう、ペアで活動をする場面等を設定した。

振り返りは、短時間でできるよう生徒の授業の目標に対して「○・△・×」の記号で評価した。

(2) 授業内容及び評価

単元名 鎌倉めぐりすごろく		
授業の概要		
「すごろく」というゲームを通して、各マスにある鎌倉に関することを体験し、鎌倉のことを知る。		
活動のねらい	手だておよび指導場面	評価および学習の様子
<ul style="list-style-type: none"> ・視覚、聴覚、触覚、嗅覚を使って「鎌倉」にどのようなものがあるのか知る。 ・ペアでの活動を通して他者を意識する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・1年間の導入となる単元のため、映像や実物等で五感を使っていろいろな体験し、得意な活動や好きな活動を見つけていった。 ・グループの仲間を意識することができるよう、すごろくはペアで行い、協力してさいころを回すようとした。 	<p>生徒の刺激に対する反応や表出を見ることができた。特に嗅覚や味覚、触覚に対する刺激に反応が良く、今後はこれらの刺激を中心に授業を進めていく。</p> <p>ペア活動では、相手に合わせた動きは教員の支援が必要だったが、相手を見たり、ペアの中での自分の役割を果たしたりすることができた。</p>

単元名 鎌倉の海を経験しよう		
授業の概要		
鎌倉の海にある物や自然を、全身を使って体験する。		
活動のねらい	手だておよび指導場面	評価および学習の様子
<ul style="list-style-type: none"> ・様々な道具や素材を触る経験を通して、感じたことを表出する。 ・集団での活動を通して、教員や友達とやり取りする力を高める。 ・身近な地域のことに興味を持ち、意欲的に参加する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・普段あまり触れることのない素材を用意し、興味を持って意欲的に参加できるようにした。 ・また、素材に触るときには、手と足を使って全身で海を感じられるように活動をした。 	<p>海藻の手触りや匂いに、それぞれが反応や表出をしていた。海の映像や音を見聞きするときには、静かにテレビに目を向ける生徒が多く見られた。また、海の素材を触るときは、手だけでなく足でも触ってみることで、抵抗が少なく活動に参加できた生徒もいた。</p>

(3) 成果と課題

○×△で評価できる振り返りシートを単元ごとに回覧で記録し、研究日にシートをもとに個々のねらいを達成できているかを教員間で確認をした。その中で生徒が興味を持って主体的に参加できる活動は、嗅覚や味覚を使ったものが多いことが分かった。また、手で触る活動に消極的だった生徒も、同じ素材を足で触ると抵抗なく落ち着いて活動できることもあった。嗅覚や味覚を刺激するような題材を選び活動内容の改善を進めた。興味の幅を広げられるように、様々な刺激を感じられるようにしていく。

また、外界とのかかわりに関しては、教員との活動は落ち着いて行い、刺激に対する表出を安定して行うことができていた。しかし、グループの仲間に對して意識を向けることが難しく、生徒同士の関りが少なくなってしまった。今後も、ペアでの活動やグループ内での発表等を通して、他者へ目を向ける機会を多く設け、他者への興味関心を仰いでいく。

社会生活 IVグループ

実態把握シート

メンバー：1年2名、2年2名、3年2名

グループの目標（自立活動の視点）

- ・五感の刺激を通して自然の様々なことを感じ、感じたことを表出することができる。
- ・集団での関わりや地域の人との関わりを通して選択する、返事をする等、伝える力につける。

グループの実態

授業を考えるうえで意識する自立活動の視点：人間関係の形成、コミュニケーション

- ・生徒それぞれが健康面に課題があるため、呼吸状態や姿勢などを整えることがベースとなる。
- ・社会的な関わりの経験が少ない。

個人のねらい

	A：個別教育計画の重点目標 (自立活動の視点)	Aをもとに立てた授業のねらい (自立活動の視点)
A	心身ともにリラックスして外からの刺激を受け入れる。	素材の匂いを嗅ぐ、感触を確かめるといった活動を、経験を通して受け入れ、やりとりを含めて楽しめるようになる。
B	様々な経験を重ね、相手に伝わりやすい表出の種類を増やす。	素材の匂いや感触を確かめ、声や表情で教員とやり取りしながら分かりやすい表出に繋げることができる。
C	いろいろな人とコミュニケーションをとる。	五感を刺激する素材等を活用し本人からの表出（瞬き、声で表出、手の動き等）を広げる。
D	いろいろな気持ちを表出することができる。	素材の感触や声等を受け入れながら快不快（表情、声等）を周囲に伝える経験を積む。
E	自分から発信できる力につける。	まわりの人に声や表情等で自分の気持ちを伝えることができる。
F	コミュニケーション能力の向上を目指す。 様々な経験を積み、表出の幅を広げる。	まわりの人に声や首振り、表情等で自分の気持ちを伝えることができる。

指導の手立て

- ・具体物を用いて本物に近い経験ができるようにする。
- ・体調に合わせて、活動内容や順番を変更していく。
- ・同じ題材を繰り返し学習する。
- ・本人と関わりのある人から初めて会う人までいろいろな人と関わる機会を設ける。
- ・本人の状態を把握し、表出をじっくり待つ。

(1) 研究の設定理由及び進め方

自立活動の視点から個々の課題を共有し整理したところ、他者への関心（人間関係の形成）や気持ちの表出（コミュニケーション）を中心としたコミュニケーション能力の向上を目指す集団であることがわかった。しかし、授業を計画するにあたり、グループ全体として大切にしたい視点や具体的な支援方法、評価の観点等については共有する機会があまりなかった。そこで、授業のねらいや具体的な指導方法、評価の観点等について話し合いや振り返りシートをもとに共有することで授業の評価と改善を行った。

(2) 授業内容及び評価

※基本的な授業のねらい、支援方法、評価の観点は年間を通して共通で行った。

*は自立活動の6項目（健、心、人、環、身、コで表記）

単元名 紙漉きをしよう、赤しそで染め物をしよう、バケツ稻を育てよう、野菜を育てよう 等		
授業の概要		
<ul style="list-style-type: none"> ・地域の人と交流する。 ・紙漉き、染め物、栽培等を体験的に行う。 	<p>活動のねらい</p> <p>手だておよび指導場面</p> <p>評価および学習の様子</p>	<p>【主体的な学びの視点】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「始まりの歌」で授業の始まりを想起させる。 *心 ・主な授業の流れを固定化することで、見通しを持たせる。 *心 ・(紙パルプ、布や媒染液等に)触る、匂いを嗅ぐなど色々な感覚に刺激を与えて興味を持たせる。 ＊環 ・選択する活動を通して意思の表出を促す。 *コ <p>【対話的な学びの視点】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・教員とのやりとりを通して快な体験を重ねたり、表出を増やしたりする支援をする。 *コ ・地域ボラとの対話、協働を通じて、学校周辺の地域に关心が持てるようにする。 ＊人 <p>【深い学びの視点】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・選択する活動を通して意思表出の経験を重ねられるようにする。 *コ

	<ul style="list-style-type: none"> ・(紙パルプ、布や媒体液等に) 触る、匂いを嗅ぐなど色々な感覚を刺激することで深い理解に繋げる。 <p>*環</p> <ul style="list-style-type: none"> ・活動を動画で記録し、振り返りの事後学習をすることで経験したことを客観的に想起させる。 *環・心 	
--	---	--

(3) 成果と課題

- ・視覚から情報を得るのが難しい生徒が多かったが、動画での振り返りを行い活動内容や授業の様子を全員で共有するという点では動画の活用は有効だった。(心理的な安定)
- ・生徒の学びのレディネスを作り出すため、コンディションを整えることの重要性を感じた。(環境の把握)
- ・繰り返しの学習の積み重ねが生徒の期待感を生み、内容理解につながることが実感できた。(心理的な安定)
- ・生徒の表情や動きを言語化してフィードバックしたり、過去の状況や感じたことなどの体験を想起させる言葉かけをしたりしてきたことで、素材に関わる体験をより楽しい気持ちで受け入れられるようになってきた。(コミュニケーション)
- ・教員主導ではなく生徒自身に「できた」「わかった」という達成感を持たせるための工夫を今後も大切にしていきたい。(環境の把握)
- ・毎回授業後に振り返りシートを活用し、主に担当した生徒を中心に記入して共有してきた。研究時の反省を受け、後半からはより客観的な評価を目指して書式を変更し、知識・技能、思考・判断・表現、主体的に学習に取り組む態度の3観点で項目を設定して評価してきた。評価は毎回行ってきたが、評価をもとに共有し授業改善につなげるための話し合いの機会が少なかったため、今後は授業改善につながる有効的な共有方法を模索する必要がある。(PDCA)

4. 研究成果と今後の課題

上記のように各グループ間で研究した内容を確認することで、個々の生徒の実態把握・それに基づく課題等を共有することができた。グループ毎のまとめを学部全体で共有できることで、次年度以降の高等部が今まで取り組んできた社会生活の授業理解を深める資料になるものができる。中間報告での指導主事からの助言を受け、今年度後期からは研究日で使用していた振り返りシートの書式を変更した。(図1→図2)) 新しい学習指導要領で育成することを目指す「資質・能力である3観点(学びに向かう力)(知識技能の習得)(思考力・判断力・表現力の育成)」で単元目標を再整理した。また評価の視点として①主体的な学びの視点②対話的な学びの視点③深い学びの視点を振り返りシートに追加した。指導計画の学習内容をそれぞれの視点で分析してどの視点が取り入れられているかグループで確認した。単元目標を観点別に当てはめることで整理され、抽象的な目標ではなくより具体的な目標になった。また主体的で対話的な深い学びの視点で何を学ばせたいか、どのように学ぶかをグループごとに指導計画を話し合うことで改善が必要な指導方法が見えてきた。

今回は振り返りシートでの活用のみにとどまったため、3つの観点を授業計画や指導案にどう取り

入れていくかが今後の課題である。

月に一度の研究日をグループでの話し合いの場とし、生徒の授業の振り返りや授業のねらいに対する評価の共有、改善の場とした。話し合いに担当教員が集まることが難しい状況のグループもあり、また生徒の学習の様子や反省を回覧等で記録するところまではできたが、授業改善に活用するところに難しさがあったという意見もあった。今後は振り返りシートやOneNote、Teams 等をグループごとに活用し、教員間の情報共有を行いながら、有効的な話し合いの場をどう設けていくかが課題である。

今後も学部として自立活動の視点による生徒の実態表を活用したグループピングを行い、客観的な評価による授業改善に取り組んでいく。

主体的で対話的な深い学びの視点による授業内容の再整理

3観点(学びに向かう力)(知識技能の習得)(思考力・判断力・表現力の育成)による単元目標の分類

図 1

R4 社会生活グループ() メモ ()月()日現在	
項目	内 容
・の実感	
・グループ	
・個々のねらい	
・教材について	
・留意点(方針)・方針(方針)	
・評価の方法(生徒・教員)	Ex. 動画を撮影して様子を確認する。手の伸びた回数を記録する。生後にアンケートを取る等
・生徒の様子	
改善点(方針)について	改善点: ..

図 2

R4 社会生活グループ() メモ ()月()日現在											
項目	内 容										
・単元名											
・何を学ぼさせたいか	(学びに向かう力)(知識技能の習得)(思考力・判断力・表現等の育成)で分類										
・指導計画・学習内容・手立てなど	<table border="1"> <tr> <td>学習内容</td> <td>指導方法、手立てなど</td> </tr> <tr> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td></td> <td></td> </tr> </table>	学習内容	指導方法、手立てなど								
学習内容	指導方法、手立てなど										
・評価の視点	<p>(主体的な学びの視点) 見通し、期待感を持つ工夫、具体的な振り返り等 P10-11 ex. 活動の流れを固定し、期待感を高める。</p> <p>(対話的な学びの視点) ベアでの活動、ディスカッション、教材を介した生徒間のやりとり等 P12-13 ex. クラスマイトの意見を聞く場面を設定する。</p> <p>(深い学びの視点) 生徒の興味のある題材、振り返り、イメージを膨らませられる等 P14-15 ex. 授業での活動を他場面への汎化ースイッチを押したら誰か来てくれる。</p>										
・生徒の様子											

肢體不自由教育部門

訪問教育

研究テーマ**在宅でのコロナ禍の学校生活について****1. 研究テーマの設定理由**

現在、在宅訪問で学校生活を送っている児童生徒は、医療面、衛生面を第一に健康の保持による心地良い暮らしを大切にして過ごしている。新型コロナウィルスの流行で、感染防止対策の臨時休校があつたり、教員がリスクの高いウィルスを運んでしまう可能性を避けるため、できるだけ自宅に伺うことをひかえながら学習支援教材を届けたりした。学校が再開してからは、感染症対策として双方向通信を活用して学校生活を開始した。現在、通学籍は感染症に留意した環境で、様々な活動が計画実施できるようになってきた。在宅訪問は、コロナ禍以前から衛生面、安全面に特に留意して行われているが、感染症が完全に収束したわけではないので、一層の感染対策をしても児童生徒と直接関わる機会を提案できる程、命に責任を持てない状況である。

そこで、在宅訪問の各児童生徒が、今まで以上に安全に学校生活に参加できることは第一にして、少しでも主体的で対話的な学校活動の時間を過ごせるよう、このテーマを設定した。

2. 研究方法

- ①今年度の在宅訪問の、小1、小5児童、中1、中2生徒の4名について、自立活動の項目に沿って実態を確認する。⇒個別教育計画実態表
- ②保護者の意向より、各児童生徒と教員の過ごし方を決めて、学校生活を計画し、実践する。

3. 研究の実際

〈学校の時間〉 訪問して欲しい（双方向通信も実施）⇒2名（1名転出）・双方向通信のみ⇒2名

〈実態把握〉 本人と一緒にいろいろな場面を過ごし、保護者や関係の医療職から実態を聞き取って自立活動の6区分27項目で実態を整理するが、コロナ禍で直接的な関わりが難しい児童生徒は、今までの実態を参照し、保護者と実態確認をして今年度の学校生活をスタートした。

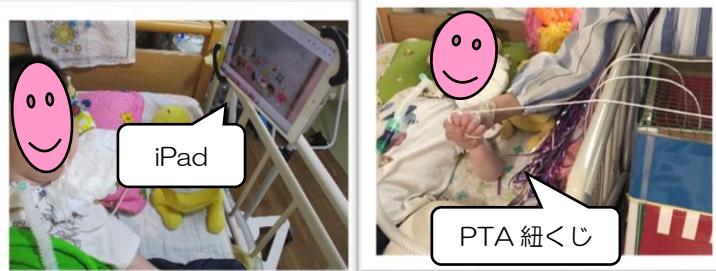
〈リモートの活用〉 神奈川県特別支援学校の訪問教育は、集団指導の機会を設定して訪問教育の充実を図ることとしている。教室などで月1回を標準に、訪問教育対象者のみの集団でも通学する児童生徒との交流でも可能で、児童生徒の状態などに応じて回数を決めることが可能である。本校の在宅訪問は、この集団活動をスクーリング（登校）と双方向通信（リモート）で行い、どちらも母学級を基本に、通学する児童生徒と共に過ごしている。

〈学校生活の実際とねらい〉 自立活動の内容に個々の興味・関心、母学級の授業内容、学部や学校の行事、季節を取り入れた教材で取り組んでいたが、コロナ禍は一人ひとりに応じた「学校の時間」が、従来よりも短縮傾向になった。そこで、家族・病院以外の「一番身近な社会：学校や友だちとのつながり」をねらいに、母学級の授業を教材にして学校生活を計画した。

この子にとって学校は何をするところなのか？「教育」の言葉に、発達状況に応じているのか？と思う反面、何をするのかな？と期待を寄せる気持ちも保護者には見られる。

【小1児童の学校生活】

- 教員の自宅訪問による学校生活（訪問看護、訪問リハ、訪問ドクターの扱いと同様の扱い）。
- 双方向通信は、訪問時に教員がつなぐ。母学級と双方の都合が合わず、計画段階。
(引継ぎより：就学前の療育では、保護者が通信をつなぎ、付き添うことに負担感が見られた)。
- 訪問教員と過ごし、学校生活に慣れてからスクーリングを考えて行くことを希望。
- 外出に向けて、医療機器を乗せられる、バギーを新規作製中。
- iPadで学校の様子の写真やビデオの試聴、アプリの活用で学習活動をしている。



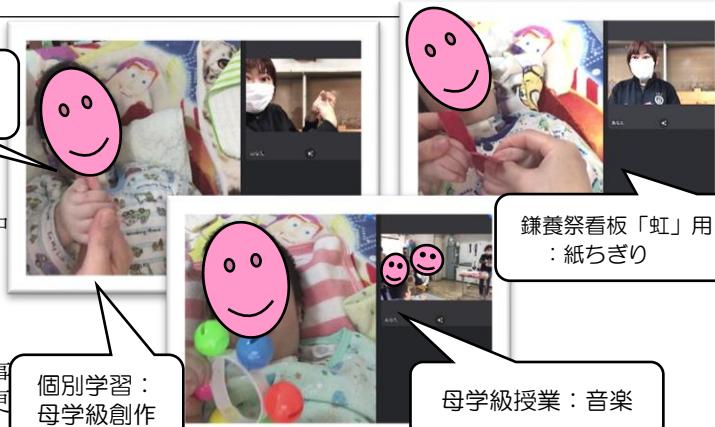
【中1生徒の学校生活】

- 双方向通信による学校生活。
- 学校の時間は、午後に設定。
午前中は、心身の健康の保持のために入浴優先。
- 小学部時代から母学級と双方向通信やスクーリングで、学校の雰囲気の中で友だちと過ごす時間を継続している。
- 経鼻経管チューブ止めシールで、クイズを出題して、友だちがイラストを当てる。



【中2生徒の学校生活】

- 双方向通信による学校生活。
- 学習時間は、午前中に設定。
11時からは、心身の健康の保持のための入浴を優先。午後は、投薬の関係で、午睡中の参加になる。双方向通信は可能。
- 中1から双方向通信を開始。
母学級や学部の友だちと一緒に授業に参加。
訪問教員と対面授業も実施。創作活動や行事の準備など、母学級の取り組みに日時を変更することで可能になり、取り組んでいる。



4. 研究の成果と今後の課題

集団指導では双方向通信を感染症防止対策に生かすことができ、学校再開からすぐに学校（身近な社会）とのつながりを保つことができた。その反面、感染防止のため訪問を控えたので、保護者から訪問再開の希望を待つ状況である。リモートは、直接の活動支援が保護者になり負担をかける。限られた狭い活動経験になることも気がかりだったが、もっと学習保障をとの要望はなかった。我が子の命に向けて、これ以上無理のない心地良い過ごしをと願う保護者の思いを受けると、教育を押し付けることなく鎌倉養護学校の児童生徒の一員という、充実感を提供する役目が学校にはあると理解した。今後も各学部との連携を継続し、在宅訪問の意義に生かしたい。

研究テーマ

自立活動の視点を活用した授業実践

1. 研究テーマの設定の理由

小さき花の園（重症心身障害児者施設）では、現在小学部1年生1名、中学部1年生1名、中学部2年生3名、高等部1年生1名の計6名の児童生徒が施設で生活をしながら訪問教育を受けている。児童生徒の実態は多岐に渡り、医療的ケアが必要な生徒がほとんどである。授業形態は集団授業と個別授業を組み合わせて行っており、車椅子で病棟内の教室へ移動し活動している。今年度も前年度に引き続き、感染症対策等のため、集団授業は児童生徒2名まで、個別授業は、教員のみで移動可能な生徒は病棟から離れ、別棟2階の「元気ルーム」や屋外での活動も行っている。

その環境下の中、授業を通して活動内容を繰り返していくことが難しく、児童生徒の課題に対する取り組みの積み重ねが少ないことが課題であった。今年度は自立活動の内容6区分27項目をもとに、実態把握表を作成し、担任でも課題内容を共有しながら、合同授業と個別授業を循環させたつながりのある指導を目指し、研究テーマとして設定した。

2. 研究方法

新入学の児童も含め、前年度の実態把握表を見直して新たに作成した。自立活動の内容6区分27項目をもとに担任で話し合い、児童生徒の課題を明確にした上で、授業に取り組んだ。個別授業においては、取り組んだ内容を付箋に記入し、ねらった区分ごとに分けて貼ることで、どの区分・項目をねらった内容なのかが分かるように記録した。いつでも情報共有しやすい形で活動内容をファイリングすることで、円滑な取り組みを心掛けた。個別授業で取り組んだ内容を記録して共有することで、集団授業の活動内容を個々の課題に照らし合わせながらMTが検討し、活かすことができるのではないかと考えた。また、今年度も前年度と同様に、指導案に自立活動における重点目標を記載する取り組みを続けているので、STとの連携も大切にしつつ、よりねらいに沿った授業展開を目指した。

3. 研究の実際

選定した項目	区分	健康の保持	心理的な安定	人間関係の形成	環境の把握	身体の動き	コミュニケーション
	(1)	ABCDEF	ABCDEF	ABCDEF	ABCDEF	ABCDEF	ABCDEF
	(2)					ABCDEF	
	(3)					D	
	(4)					D	
	(5)						
自立活動の視点から見た実態	A 小1：外からの働きかけに対して、視線や顔の向きを合わせる。 B 中1：視線や表情で意思を伝えることができる C 中2：聴覚優位、前傾姿勢を保持することで上肢を小さく動かすことができる。 D 中2：呈示されたものに手を伸ばし、目的をもって右上肢を動かすことができる。 E 中2：発声や頷き手の動きで意思を伝えることができる。摘まんだり放したりできる。 F 高1：不随意運動があるが、上肢を動かすことができる。視線や声表情で意思を伝える。						

個別授業をする際は、それぞれの担任で区分ごとにねらいを定めて取り組むことができた。情報共有が円滑に行われることで、課題内容の積み重ねをねらって重点的に取り組むことができたり、取り組みが足りない部分に気づくことで、その区分に取り組んだりすることができた。

新入学の児童を例に挙げると、入学当初は学校生活に慣れていないこともあったが、身体接触や聴覚優位による過敏で頻回に身体緊張を起こしており、集団授業に取り組むことが難しい日もあつた。そこで今年度の研究の取り組みを活かして、個別授業で身体接触を主とした活動や聴覚刺激が少なくなるような取り組みを続けたことで、少しずつ身体緊張が起こる回数が減ったり、時間が短くなったりしてきた。落ち着いて集団授業に参加できるようになってからは、新たに本人なりのコミュニケーションの表出が見られるようになり、それを活かした課題を個別授業で行うことができるようになるなど、個別授業と集団授業をうまく循環させることで、学習の積み重ねにつなげることができた。

4. 研究成果と今後の課題

施設内での生活はコロナ禍の影響が依然として強くあり、活動内容や参加人数に制限が多く、できることも少ない中、担任が同じ方向性をもって個別授業や集団授業に取り組むことで、児童生徒の課題に沿った授業を展開することができた。

ただ、集団授業とはいえ2名体制なので、集団での学習という面では、児童生徒間のかかわりが少なく、この環境下の中でどのように子ども同士のかかわりを増やすことができるのかが課題である。実態的に相手を意識することが難しい児童生徒もいるので、その点も含めて工夫が必要であると感じた。

知的障害教育部門

高等部 本校

研究テーマ 集団としての実態把握をもとにした授業の計画・実践を通して

1. 研究テーマの設定の理由

本校高等部 B 部門の個別教育計画のスケジュールは、年度初めに「生徒の実態」、「年間目標」を作成し、7月に中間評価、2月に年間評価を作成する。提出前に保護者、担任間で内容を共有しているものの、進路指導、保護者対応、生徒指導に追われる日常の中、学年間で生徒全員の実態について共有する時間はあまり持たれていない。また、特に自立活動の視点で生徒の実態を捉えたり、ねらいを立てたり、教員間で共有する機会はこれまでにはなかった。

このような学部の現状より、学年の教員で一人ひとりの実態や学年の分布を共有すること、また、学年生徒の分布表を活用して自立活動的視点でのねらいを設定し、生徒にアプローチすることで授業を改善することを目指した。

2. 研究方法

令和 3 年度

- 個別教育計画作成のための教員用資料に、自立活動の項目立てを行い、自立活動の視点での実態把握を進める
- 個々の生徒のニーズを考え、6 区分27項目の表（以下、「集団の自立活動実態表」）に反映させ、学年職員での共有を図る
- 研究授業の学習指導案中に「集団の自立活動実態表」を取り入れること（科目のねらいに加えて、学年生徒の分布表を活用して自立活動的視点でのねらいを設定し、生徒にアプローチし、授業改善を目指す取り組み）を行う

令和 4 年度

上記 a ~ c の取り組みの継続・発展に加え、以下の取り組みを行った。

- 自立活動の視点から実態を把握する根拠となる学習指導要領のとらえ方がそれぞれ異なっているという令和 3 年度の反省より、学部内での自立活動についての共通理解を図ることを目指し、学習指導要領解説自立活動編を共有する機会を設定する
- 学部全体での自立活動の視点を踏まえた授業づくり・授業改善の方法、個別教育計画に反映させた自立活動の実態と集団の自立活動実態表等を継続的に活用する方法を検討する

3. 研究の実際

- 個別教育計画の実態に自立活動の項目立てを行う
→年度初めに個別教育計画を作成するにあたって、自立活動の項目立てを行い、自立活動の視点で生徒の実態・課題把握を行い、担任間での共通理解を図った。
- 個々の生徒のニーズを考え、6 区分27項目の表（以下、「集団の自立活動実態表」）に反映させ、学年職員での共有を図る
→生徒集団（学年単位）の自立活動についてのニーズ（課題の傾向）をとらえやすくすることをねらって、a の実態把握、共通理解をもとに、表内での該当すると思われる部分に学年生徒の氏名を書き込んだものを見直し更新（新入生は新規作成）した。
- 研究授業の学習指導案中に「集団の自立活動実態表」を取り入れる
→学習指導案中に、自立活動についての学習目標や手立てを生徒ごとに記入することに代

えて、集団の自立活動実態表を取り込み、学年単位など大きな集団での授業や、縦割りのグルーピングで行う授業などにおいて準備をしやすくした。

- d. 学部内で自立活動について共通理解を図るために学習指導要領解説自立活動編を共有する機会を設定する。
 →日々の授業や支援方法の改善に役立やすいと考え、学習指導要領解説自立活動編のうち、「第6章 自立活動の内容」の部分を学部教員全員に配付し、知識を深める取り組みを行った。
- e. 学部全体で自立活動の視点を踏まえた授業づくり・授業改善の方法、個別教育計画に反映させた自立活動の実態と集団の自立活動実態表等を継続的に活用する方法を検討
 →学部内で使用されることが多い指導略案に、新たに「自立活動の視点」という項目を取り入れた指導案作成を行った上で授業に取り組んだ。
 →今回の取り組みについて、学部教員で振り返るとともに、研究テーマとしての取り組みが終了した後にも、自立活動の視点を踏まえた指導・支援方法の改善を継続的、効果的に行われることをねらって、学部アンケートを行い、意見を集約した。

4. 研究成果と今後の課題

自立活動の視点で生徒の実態を把握し、学年の教員間でそれを共有する機会を設けたことについては、学部の研究まとめアンケート結果からも学部にとっておおむね有効であったと言える。学部研究について、指導主事より助言を受けた際も、高等部 B 部門で、自立活動の視点からの実態把握を継続的に行う取り組みは貴重であるとの評価を受けた。また、高等部 B 部門では、集団の規模の大きさからも教員個人の感覚に基づいて日々の指導を行うことも多く、そのような状況の中で、共通のものさしを作成し理解を深めることは、生徒への指導・支援の質の向上はもちろんのことでありながら、中長期的に捉えると、指導計画の組み立てや日々の授業づくりにおけるコスト削減にも繋がっていくという視点を得ることもできた。

学部の教員からは、今回の取り組みについて、以下の意見を得た。

取り組みによるメリット

- ・個別教育計画の目標立てがしやすくなった。
- ・自立活動の視点は、生徒の実態把握において不可欠な項目と感じていた。個別教育計画に文章化することで、指導・支援の改善に向けた取り組みのきっかけとなる。
- ・集団授業における課題選定に役立った
- ・共通理解を深めたことによって、指導の根拠になった。
- ・集団の実態の傾向をつかむこと（おおよその実態把握）ができた。分布を捉えることができ、グルーピングをしやすくなった。
- ・表に整理して捉えることで、手立てを考えることに役立った。
- ・これまで意識して行うことがなかった視点での話し合いがきっかけとなり、生徒の行動の背景を理解する機会となる。
- ・授業の計画段階で、自立活動の視点を意識することは必要であり、教員の意識の向上に繋がった。

改善や発展の可能性

- ・個別教育計画の実態表や集団の自立活動実態表の作成に労力を費やしたが、労力に見合

った活用に至らなかったと感じる

- ・集団の実態表のよりスムーズな作成方法の検討が必要（個別教育計画実態表からの効率のよい情報整理の方法を検討する）
- ・指導略案の内容の充実（自立活動の視点での目標立てや評価を行うことや、より具体的な支援の手立ての明記など）
- ・集団の自立活動実態表を、学年集団のみならず、学習グループや作業学習等の活動単位で作成し、活用の幅の拡大や質の向上を図る

今回の学部研究の取り組みを通して、自立活動の視点を踏まえ、より充実した実態把握や授業実践に取り組むことができ、教員間でも、成果や効果を実感することができたと言える。しかしながら、授業改善についての評価を行う資料作成（記録の作成等）が十分でなかった点が大きな反省点として挙げられる。

今年度、2年計画の研究の取り組みとしては一区切りとなる。しかし、自立活動の観点から課題を抑え、生徒にアプローチをしていくことは今後も必要である。2年間の取り組みにより、個別教育計画の改善等はデフォルトとなりつつあるが、その他の取り組みについて、発展の形も含めて、今後の学部運営の中で中長期的な視点に立った取り組みを継続していきたい。

資料 集団の自立活動実態表

(参考) 自立活動の6区分27項目　※児童生徒個のグループ分けの表の参考資料						
	健康の保持	心理的な安定	人間関係の形成	環境の把握	身体の動き	コミュニケーション
選定した項目	(1)生活のリズムや生活習慣の形成に関すること。	(1)情緒の安定に関すること。	(1)他者とのかかわりの基礎に関すること。	(1)保有する感觉の活用に関すること。	(1)姿勢と運動・動作の基本的技術に関すること。	(1)コミュニケーションの基礎的能力に関すること。
	経当生徒	経当生徒	経当生徒	経当生徒	経当生徒	経当生徒
	(2)病気の状態の理解と生活管理に関すること。	(2)状況の理解と変化への対応に関すること。	(2)他者の意図や感情の理解に関すること。	(2)感觉や認知の特性についての理解と対応に関すること。	(2)姿勢保持と運動・動作の補助的手段の活用に関すること。	(2)言語の受容と表出に関するこ
	経当生徒	経当生徒	経当生徒	経当生徒	経当生徒	経当生徒
	(3)身体各部の状態の理解と養護に関すること。	(3)障害による学習上または生活上の困難を改善・克服する意欲に関すること。	(3)自己の理解と行動の調整に関すること。	(3)感觉の特徴及び代行手段の活用に関すること。	(3)日常生活に必要な基本動作に関するこ	(3)言語の形成と活用に関するこ
	経当生徒	経当生徒	経当生徒	経当生徒	経当生徒	経当生徒
	(4)障害の特性の理解と生活環境の調整に関するこ		(4)集団の参加の基礎に関するこ	(4)感觉を統合的に活用した周囲の状況についての把握と状況に応じた行動に関するこ	(4)身体の移動能力に関するこ	(4)コミュニケーションの手段の選択と活用に関するこ
	経当生徒			経当生徒	経当生徒	経当生徒
	(5)健康状態の維持・改善に関するこ			(5)認知や行動の手掛かりとなる概念の形成に関するこ	(5)作業に必要な動作と円滑な連行に関するこ	(5)状況に応じたコミュニケーションに関するこ
	経当生徒			経当生徒	経当生徒	経当生徒

知的障害教育部門

高等部 分教室

研究テーマ

ねらいとそれに対する学習活動の内容等の共通理解

1. 研究テーマの設定の理由

昨年度、生徒の実態把握を自立活動の視点から行ったことで、教員の気づきがいくつもあった。そして指導に当たる教員の間で、生徒がかかえる課題とそれを指導・支援する教材・学習活動について共通理解が進んでいた。そこで今年度は分教室研究のテーマを“ねらいとそれに対する学習活動の内容等の共通理解”として、授業改善をさらに進めるよう研究に取り組んだ。

2. 研究方法

- 「職業」の授業について、班ごとにねらいと学習内容を確認する。
- ねらい、学習活動が自立活動 6 区分 27 項目にどのように対応しているか検討をする。
- 生徒の実態に照らし合わせ、授業内容、指導方法等が適切であり、効果的であるか検討する。
- 改善が必要であれば、どの部分を変更することが有効なのかを検討し、実施する。
- 実態把握から検討、改善、実施までのサイクルの経験を、他の授業にも活かすことができているかを、確認をする。

3. 研究の実際

- はじめに学年ごとに個別教育計画に記載していた内容を、自立活動の観点から目標、取り組みの確認を行った。昨年度から行っていた 6 区分 27 項目に照らし合わせてみると、コミュニケーションの面で支援を必要とする生徒が多いことなどの確認ができた。特徴を捉えるには有効であったが、個々に支援方法が異なるので、区分もしくは項目ごとに、有効な支援方法を挙げてまとめることが考えられた。
- 上記を踏まえて、「職業」の授業での取り組みを 6 区分（27 項目）に照らし合わせること、6 区分（27 項目）の支援にあたる課題、活動を挙げることで、研究テーマである“ねらいとそれに対する学習活動の内容等の共通理解（“自立活動の項目 ⇄ 取り組み内容”の関係を教員が共通理解する。）”を図った。

【例】（工芸班 学習内容と自立活動の項目）から一部抜粋 コミュニケーション

題材	学習内容	自立活動の項目	工夫
絞り	並縫い	身体の動き	・各々が持っている能力別に 2mm 間隔の並縫い、絞り、染色、アイロンがけ、ミシンがけに担当を分け、手指の巧緻性を高めるようにしている。
染め	絞り	コミュ	・一連の作業において最後まで注意の集中が続かない場合は、作業工程を分割してその都度報告させ、一つ一つの工程に短時間集中することから始めて、徐々に作業に集中できる時間を長くするようにしている。
	染色	心理的な安定	・同じ作業を繰り返すため、生徒にとって報告、質問のタイミングがわかりやすい。
	アイロン		・並縫い～絞り、その後の製品化にかかわることで作業の見通しが持ちやすい。
	ミシン		

		・同じ作業の繰り返しの為、全体の流れがわかり、生徒の自主性を高められる。
--	--	--------------------------------------

【例】（環境整備班　自立活動の項目と学習活動）　から一部抜粋

健康の保持	心理的な安定	人間関係の形成
(1) 生活のリズムや生活習慣の形成に関すること。 ・作用着をきちんと着る。 ・季節に合わせた上着の着用 ・作業後の手洗い。	(1) 情緒の安定に関すること。 ・作業内容がわからなくなったりときなど、適切なタイミングでメモを見返したり、質問をしたりする。	(1) 他者とのかかわりの基礎に関すること。 ・一緒に作業する相手との協力、分担。

- 実態把握とねらい・内容の共通理解が進み、教材や授業展開の改善に取り組んだ。（記入式プリントの変更、絞り染めの工程をより細分化した、グループの編成方法等）
- 研究を進めるにあたり、「職業」での実践を他の授業においても活かすことができているか、“自立活動の視点から生徒の実態把握と授業に活かしていること、授業改善を図っていること”という点で、「体育」の授業を指導主事、管理職、教務GLに見ていただき次のようなアドバイスをいただいた。
 - ・「他者のプレーをほめる、励ますような言葉（「ナイスプレー！」等）を使うことで、心地よさを体験させ、積極的な活動を引き出せるとよい。
 - ・「相手の名前を呼んでボールを投げる。キャッチする方も返事をする。」というルールは相手を意識するという面でよいと思う。
 - ・グループで何回キャッチボールができたか等、競う要素を取り入れ、積極性を引き出せるとよい。
 - ・「指導を工夫するための観点として、自立活動に注目して取り組むことは継続し、授業改善につなげて欲しい。授業改善は、授業の工夫のあと、生徒の変化をメモに残す等して検証し、その授業、その工夫を評価して行われるものなので、授業評価をして授業改善につなげて欲しい。」

4. 研究成果と今後の課題

- よりよい授業を行うために、自立活動の視点から生徒の実態把握、授業内容の検討、指導の実践を見直したことで教員の共通理解が進み、必要とされる指導内容、効果的な指導方法を検討しながら授業改善に取り組んだ。教材のプリントでは生徒が記入する量の加減をしたり、一連の作業工程を生徒に合わせて細分化したりして、効果を得た。
- 生徒のコミュニケーションについての課題は、常にある課題である。その生徒、その集団に応じた指導内容、方法をよりよいものにするために、実態把握と教材を含めた支援の方法等、教員間で共通理解を深めながら取り組むことが重要である。
- 「職業」の授業を中心に研究を進め、その経験を他の授業でも活かせているか検討をした。数値や言葉では表せないが、それぞれの教員がその効果を感じている。これからも、その時の生徒の実態をいろいろな方向からとらえ、それに応じた課題、教材を準備し、その生徒が吸収しやすいように教員が指導に当たるように心がけること、また生徒の反応を観察しながら柔軟に対応し、検討、改善、実施までのサイクルをすることが、授業改善には重要である。

おわりに

新学習指導要領が改訂され、2020年度に小学校、2021年度に中学校、2022年度には高等学校と順に実施されています。今回の改訂の目的は、「社会の変化に対応し、生き抜くために必要な資質・能力を備えた子どもたちを育む」ことにあります。そして新たな取り組みとして、「英語」「プログラミング」「アクティブ・ラーニング」が導入されました。

本校では、令和3年度から「主体的・対話的で深い学び(アクティブ・ラーニング)」に着目し、児童生徒にとっての主体的・対話的で深い学びとは何なにかを全校テーマ「鎌倉養護学校における組織的な授業改善に関する研究」を通して考えることにしました。

令和3年度には、それまで学部ごとに異なっていた児童生徒の実態把握の捉え方を自立活動の内容6区分27項目に沿って学校全体で捉え直すことを行いました。これにより、教員の実態把握の捉え方のズレを修正することができたとともに、同じ視点に立つことで児童生徒1人ひとりについて何を大切にしながら授業展開していくべきかが明らかになってきました。令和4年度には、授業展開後の評価の在り方について学部や学年ごとに話し合われるようになり、組織的な授業改善ができるようになってきました。

新しい学習指導要領が目指す「主体的・対話的で深い学び(アクティブ・ラーニング)」の視点からの授業改善」とは、子どもたちの「学び」そのものが、「アクティブ」で意味あるものとなっているかという視点から授業をより良くしていくことを指しています。例を挙げると

- ・一つ一つの知識がつながり、「わかった!」「おもしろい!」と思える授業
- ・見通しをもって、粘り強く取り組む力が身に付く授業
- ・周りの人たちと共に考え、学び、新しい発見や豊かな発想が生まれる授業
- ・自分の学びを振り返り、次の学びや生活に生かす力を育む授業

などです。

このような授業を行うことで、学校教育における質の高い学びを実現し、子どもたちが学習内容を深く理解し、資質・能力を身に付け、生涯にわたって能動的(アクティブ)に学び続けられるようになることを目指しています。

このような視点で捉えると、本校が取り組んでいる授業改善は、まだまだ不十分であり、授業改善そのものは、日々取り組んでいかなければならない仕事です。そして、児童生徒のみならず、私たち教員も「社会の変化」に対応できるようにならなければなりません。新しいことを取り入れ、工夫を凝らしていくことが一層求められている時代になっています。

昨年度は、コロナ禍の影響があり、外部から助言者をお呼びすることができませんでしたが、今年度は総合教育センターから学部ごとに指導主事をお呼びし、授業を見ていただいて貴重な助言をいただくことができました。本当にありがとうございました。厚くお礼申し上げます。

最後に、研究冊子を多くの方にお読みいただき、忌憚のないご意見をいただければと思います。そのことが私たち教職員の励みにもなりますので、是非よろしくお願ひいたします。

令和5年3月

神奈川県立鎌倉養護学校
副校長 佐藤 浩栄

